

青森市立古川小学校におけるねぶた教育の実態調査

～ねぶた教育の新たな積極面の探求～



弘前大学教育学部 学校教育教員養成課程 小学校教育専攻

10P1150 鈴木 悠太

論文概要

2010年に弘前大学教育学部「ねぶた・ねぶた」と学校教育プロジェクトの調査によると、青森市内の中でねぶた教育を実施しているのは49%と半数近くであることが明らかになった。しかし、実施していない小学校で、今後ねぶた教育を予定しているところは無いといった現状である。

ねぶた教育の実施予定が無いといった現状の背景として考えられるのは、「青森ねぶた」に関する指導ができる教員が少ないことや、実施校で主に授業を展開している「総合的な学習の時間」の授業時数減少が背景の一つとして考えられる。このような背景がねぶた教育実施校の減少に繋がることも必ずしも無いとは言えない。

そのため、今後のねぶた教育の普及のために、ねぶた教育の積極面と問題点を探求し、問題点の改善のための知見を提供していくことが必要であると考え。そこで本研究では、ねぶた教育を実施している青森市立古川小学校に調査協力を要請し、当校への訪問調査と児童・保護者・教職員・地域住民へのアンケート調査から、古川小学校のねぶた教育の現状と積極面・問題点を明らかにし、当校のねぶた教育の問題点に対する知見を提供していくとともに、ねぶた教育が学校と保護者・地域住民の良好な関係づくりに貢献できるものであるかどうかを明らかにすることを本研究の目的とした。

その結果、対象校の児童に対する「青森ねぶた」に関する意識調査では、「青森ねぶた」に対する興味・関心を持つ割合は、ねぶた教育の非実施校より高かった。しかし、「青森ねぶた」を継承することの必要性を感じている児童の割合は非実施校と差がなかった。この結果と先行研究から、沿道の観客へ活動を発表する機会である「運行」は、伝統文化尊重の意識を高めることのできる活動であるが、子どもたちの伝統文化継承の意識を高めることには効果がいまひとつであることが明らかになった。

次に、ねぶた教育が学校と保護者・地域住民の良好な関係づくりに貢献できる活動であるのかを明らかにするため実施したアンケート調査では、ねぶた教育により学校との関係性が良くなったと回答した保護者は約7割であった。この結果より、ねぶた教育は保護者との関係づくりに貢献できる活動であることが明らかになった。しかし、地域住民に対しては効果がいまひとつであった。古川小学校のねぶた教育の実践から要因として考えられるのは、地域住民に対し「運行」の機会を見てもらうだけでは関係性を築くことができないことである。しかし、子供会の減少を悲観している方が多数存在し、学校の間での子どもたちとの関わりを望んでいた地域住民が存在していたことから、ねぶた教育の場に地域住民を招くということが良好な関係づくりのために必要な活動であることが考えられた。

教職員対象アンケートからは、ねぶた教育の実施や地域の伝統文化を取り上げる必要性に関して、肯定的な評価をする教職員が多数存在することが明らかになった。これは、子どもたちの地域を愛する心情を育てる活動として大きく期待している表れであると言える。

総合的な考察として、子ども・保護者・地域住民・教職員の四者でねぶた教育の実施に肯定的な評価をしていることが明らかになり、積極面としては、子どもたちの伝統尊重の意識の向上や、学校と保護者・地域住民の良い関係性の構築が期待できることが明らかになった。問題点より、子どもたちが主体となった活動の設定と地域住民を積極的に招くねぶた教育が今後のねぶた教育の充実に繋がる活動であると考えられる。

はじめに

私は、小学生の頃から現在まで、青森県を代表する祭りの一つである青森ねぶた祭りへ毎年参加している。小学校から続けている囃子で参加したり、友人と跳人で参加したり、次々と向こうからやってくるねぶたを沿道から見たりするなど様々な形で青森ねぶた祭りを堪能している。その青森ねぶた祭りの中でも私は、祭り開始の合図である花火が打ちあがった瞬間がたまらなく好きである。花火の音に対する沿道からの歓声、花火と同時に点灯するねぶた本体、一斉に演奏が始まるお囃子が一気に会場の雰囲気を高揚させる。私にとって青森ねぶた祭りは無くしてはならない祭りであり、無くしてはならない祭りであると感じる。

私自身「青森ねぶた」の良さを学校現場で子どもたちに伝えていきたい。そして、「青森ねぶた」の伝統を受け継いでいく子どもを育てていきたいと考える。そのために、青森市内の小学校でねぶた教育がどのように実施されているのか、実施することの積極面・問題面はどのような面であるのか把握しておかなければならない。そして「地域の活性化」「開かれた学校」が謳われる現代社会において、ねぶた教育は学校と保護者・地域住民を繋ぐための架け橋となることができるのかを明らかにしたいと考えるため本研究に着手した。

加えて、調査協力校である青森市立古川小学校は私の母校であり、ねぶた教育に力を入れている小学校である。私は大学生生活の間に当校のねぶた囃子の指導に3年間携わってきた。そこで感じたのは、青森市立古川小学校のねぶた「古小ねぶた」は地域の宝物であるということである。学校と保護者、地域住民が一体となって10年目を迎えた「古小ねぶた」の今後の発展に貢献したいということも本研究の動機の一つである。

目次

はじめに	1
第1章 研究目的・研究方法	
第1節 研究目的	6
第2節 研究方法	10
第3節 先行研究で実施した児童への「ねふた・ねぶた」に関する意識調査	11
第2章 青森市立古川小学校におけるねぶた教育	
第1節 取り組みの概要	
1項 学校紹介	14
2項 ねぶた教育の始まり	14
3項 活動領域	14
4項 今年度の活動内容	16
5項 古川地域パレード	18
6項 その他のねぶた活動	19
第2節 「古小ねぶた」10年間の歴史	20
第3章 児童を対象とした「青森ねぶた」に関する意識調査と ねぶた教育が与える子どもへの影響	
第1節 児童対象アンケート調査	
1項 児童対象アンケート調査結果	21
2項 児童対象アンケート調査考察	25
第2節 ねぶた教育が与える子どもへの影響についての考察	
1項 青森ねぶたに対する誇り	28
2項 伝統文化の尊重と伝統継承の意識	29
3項 「青森ねぶた」そのものに対する意識	30
第4章 保護者・地域住民・教員対象のねぶた教育に関する意識調査	
第1節 保護者対象アンケート調査	
1項 保護者対象アンケート調査結果	32
2項 保護者対象アンケート調査の考察	37
第2節 地域住民対象アンケート調査	
1項 地域住民アンケート調査結果	40

2 項	地域住民アンケート調査の考察	43
第 3 節	教職員対象アンケート調査	
1 項	教職員対象アンケート調査結果	45
2 項	教職員対象アンケート調査の考察	47
第 5 章	結論	
第 1 節	古川小学校におけるねぶた教育への総合的考察	
1 項	古川小学校におけるねぶた活動の積極面	49
2 項	古川小学校におけるねぶた活動の問題面	50
第 2 節	ねぶた教育に対する保護者・地域住民・教職員の 意識と効果についての一考察	51
謝辞		53
参考文献		54

第1章 研究目的・研究方法

第1節 研究目的

「青森ねぶた」は東北三大祭りの一つであり、国の重要無形民俗文化財である。その「青森ねぶた」を観覧するため、日本全国、そして世界各地から毎年 300 万人以上の観光客が青森県を訪れている。祭りの中では、花笠・浴衣を身に纏い「ラッセーラ、ラッセーラ」の掛け声と浴衣につけた鈴の音で運行コースを盛り上げる跳人、青森市内全域に届くのではないかと観客に思わせるような、響きのある笛・手振り鉦・太鼓の囃子、そして、製作者の魂が込められ、沿道の観客を飲み込んでしまうような迫力のある大型ねぶた本体が一体となって祭りを構成している。その「青森ねぶた」は、北海道の函館いか祭りへの参加、東京都渋谷区の渋谷センター街や表参道などへ進出している。更に、国内に留まらず、韓国のソウル市内やアメリカのロサンゼルス、2013年には台湾へ進出するというように、日本全国、世界各地へと、地元青森県の誇る伝統文化として発信されている。

このように「青森ねぶた」が各地に発信されている中で、未来の青森県を担うであろう子どもたちへ「青森ねぶた」を継承するために、ねぶた教育を実施している青森市内の小学校の割合は 49.0%であった。これは、2011年2月（2010年度）に、弘前大学教育学部「ねぶた・ねぶた」と学校教育研究プロジェクトが実施した「4市（青森市・弘前市・五所川原市・黒石市）の小・中学校におけるねぶた・ねぶた・立佞武多と学校教育との関わり調査(2010年版)」で明らかにされた結果である。

・ねぶた・ねぶた・立佞武多の学校での取り組み（活動）の有無と活動内容（一部抜粋）

《2010年度調査》

* 複数回答可

	回答 学校 数	活動の現状と過去の活動経験の有無											
		本年度 活動 実施校数		本年度 製作・制作 実施校		本年度 参加・練習 実施校		本年度 活動 非実施校		製作・制作 実施 経験校		参加・運行 実施 経験校	
		校	%	校	%	校	%	校	%	校	%	校	%
青森市小学校	49	24	49.0	8	16.3	16	32.7	25	51.0	4	8.2	2	4.1

※1 %の分母は回答学校数、実施経験は過去5年間（2005～2009年度）について質問した。

※2 「製作」は紙貼り以降、「制作」は骨組みからの活動を指して調査を実施した。

※3 「練習」は運行のための笛、手振り鉦、太鼓等の練習である。

青森市内約半数の小学校がねぶた教育を実施しているという結果が明らかになったことは、肯定的な結果であるのか、それとも否定的な結果であるのかは何とも言い難い。そして、問題となるのは次の調査結果である。

・次年度実施の有無 (一部抜粋)

《2010 年度調査》

	回答 学校 数	次年度実施予定の有無			
		特に予定 していない (無回答含む)		予定している	
	校	%	校	%	
青森市小学校	25	25	100.0	0	0.0

青森市内の小学校で、ねぶた教育を実施する予定の学校は無いという結果である。実施しない理由として二つ理由が挙げられる。

①「青森ねぶた」に関する指導ができる教員が少ない。

2008年に実施した「ねぶた・ねぶた祭り運行団体と子ども・学校との関わり調査(運行団体調査)」によると、学校に赴き、「青森ねぶた」に関する活動(ねぶた制作とねぶた囃子の練習)を指導した青森市のねぶた運行団体の数は以下の通りとなっている。

・学校での子どもたちへの指導・支援内容(複数回答あり)

《2008 年度調査》

	ねぶた製作	囃子
団体数	6	16

これに対して、「青森ねぶた」に関わる活動(ねぶた制作と囃子の練習)を実施した、青森市内の小・中学校の数は以下の通りとなっている。

・ねぶた・ねぶた・立佞武多の学校での取り組み(活動)の活動内容

	ねぶた製作 (製作・制作実施校)	囃子 (練習実施校)
2006 年度	11	25
2010 年度	10	24

「ねぶた制作」を実施している学校の約半分には運行団体、そして、「囃子」では約 6~7 割の運行団体関わっている。運行団体からの指導者がねぶた制作よりも囃子の指導に多く学校へ携わっている理由として考えられるのは、一人で教える場合に囃子の指導者が笛・手振り鉦・太鼓の三種の楽器での演奏が可能でなければならないことが挙げられる。運行

団体の囃子方でも笛・手振り鉦・太鼓の三種の演奏する人物は僅かばかりしか存在しない。そのため囃子の指導では、運行団体からの指導者がねぶた製作よりも多く学校への指導に携わっていると考えられる。

ねぶた製作と囃子の指導は専門的な技術が求められる。そのため、運行団体からの指導者を招かずに、ねぶた教育が実施されている学校では、昔からねぶた製作や囃子を経験している教員がいることがねぶた教育の実施を成り立たせている要因の一つと考察した。

②ねぶた教育を実施している「総合的な学習の時間」の標準授業時数の減少

「青森ねぶた」に関する活動を学校の授業内で実施している学校において、「総合的な学習の時間」に授業を展開している学校が多い。平成 14 年度改訂の学習指導要領において、「総合的な学習の時間」は年間で 105～110 時間の授業時数が設定されていた。しかし、平成 23 年度改訂の学習指導要領では、35～40 時間の授業時数の減少により、「総合的な学習の時間」を実施する学年は全て年間 70 時間の授業時数となった。

平成 14 年度改訂学習指導要領

年度	小学校				中学校		
	3年	4年	5年	6年	1年	2年	3年
20	105	105	110	110	70～ 100	70～ 105	70～ 130



平成 23 年度改訂学習指導要領

21	95	100	75～	75～	50～ 65	70～ 105	70～ 130
22			110	110			
23	70	70	70	70	50	70	70
24							

しかしこのような現状がある中でも、私は、ねぶた教育を実施する学校を増やしていくべきであると考えます。理由は二つです。

まず一つ目は、青森県のシンボル「青森ねぶた」を次の世代へと継承することができる子どもたちの育成が可能である点が挙げられる。これは、第 3 節で詳しく紹介するが、ねぶた教育を行うことで、子どもたちの「青森ねぶた」を継承することの意識や、興味・関心が肯定的

な数値になったことが表れていた。加えて、一つの祭を全員で創り上げることによって、クラスの雰囲気が悪くなったケースもあった。このことから、地域の祭りを教育活動で実施することの教育的効果は個人だけではなく、学校全体をより良いものにできるといった積極面がある。

二つ目は、学校と保護者・地域住民を繋ぐ架け橋になる可能性が秘められている点である。今、いじめや不登校、そして、青少年の凶悪な犯罪が続発している中で、学校と家庭・地域社会がより一層深く結びついて子どもたちを育てていくことが求められている。そこで、保護者・地域住民の方々と活動を共にすることが比較的容易な「青森ねぶた」を学校教育に取り入れることで、学校と保護者・地域住民間の良好な関係作りに貢献できる取り組みになると私は考える。

ねぶた教育の普及のため、私はねぶた教育の与える新たな積極面・問題点を探求し、知見を提供していくことが必要であると考え。そのため本研究では、ねぶた本体の製作からお囃子の練習を「総合的な学習の時間」の領域で取り入れており、地域パレードや青森ねぶた祭への参加といった豊富なねぶた教育を実施している青森市立古川小学校に調査協力を要請した。

古川小学校への訪問調査と当校の児童・保護者・教職員・地域住民へのアンケート調査から、古川小学校のねぶた教育の現状と積極面・問題点を明らかにし、当校のねぶた教育の問題点に対する知見を提供していく。そして、先行研究で明らかにされた「青森ねぶた・弘前ねぶた」に対する子どもたちの意識調査の結果を古川小学校での意識調査の結果を照らし合わせて、ねぶた教育の子どもたちに与える効果を新たに考察していく。

加えて、これまでの研究では、子どもたちへの意識調査を主として行われてきたが、本研究では、ねぶた教育の新たな可能性を探るために、子どもたちへの意識調査と並行して、保護者・地域住民へのねぶた教育に対する意識調査を行っていく。そこで、ねぶた教育は学校と保護者・地域住民間での良好な関係作りに貢献できる活動になるのかを明らかにしていくことも目的の一つである。

第2節 研究方法

研究方法は以下の通りである。

(1) 先行研究の調査・整理

ねぶた・ねぶた教育についての先行研究を調査し、ねぶた・ねぶた教育の現状や子どもたちの意識について整理する。

(2) 青森市立古川小学校での訪問調査

調査対象校である、青森市立古川小学校を訪問し「総合的な活動の時間」で実施されている、ねぶた教育の実態について調査する。加えて、実際に古川地域パレード・青森ねぶた祭りを観覧し、古川小学校でのねぶた教育の現状を探求していく。

(3) 調査対象校での児童,保護者,地域住民,教職員対象アンケート調査

調査対象校の児童,保護者・地域住民,教職員へのねぶた教育が与える影響,ねぶた教育への意識をアンケート調査と先行研究との比較から明らかにしていく。

(4) 児童,保護者,地域住民,教職員のねぶた教育に対する意識についての考察

古川小学校でのねぶた教育での現状と(3)の結果から,ねぶた教育の与える積極面・問題点を明らかにする。そして,問題面を解決するための知見を提供していく。

第3節 先行研究で実施した児童への「ねぶた・ねぶた」に関する意識調査

ここでは、これまでの先行調査で明らかになった子どもたちが持つ地域のお祭りに対する意識調査の結果を紹介していく。紹介するのは、弘前大学教育学部ねぶた・ねぶたと学校教育研究プロジェクトが2005年11月に実施した青森市内のA小学校第4学年151名対象の調査と2011年度に弘前市立北小学校の第4学年69名対象に実施された「ねぶたに関する意識調査」の2つの調査で実施された5つの項目である。

はじめに、子どもたちが持つ「青森ねぶた・弘前ねぶた」などの地域のお祭りに対する誇りや伝統の継承についての意識を紹介する。

1 青森ねぶたが、日本有数の祭りだと思う。 (青森市立A小学校 第4学年151名)

(1= そう思わない, 2= どちらかといえばそう思わない, 3= どちらでもない, 4= どちらかといえばそう思う, 5= 強くそう思う) = 4+5を肯定的と評価

	1	2	3	4	5
青森市立 A 小 計 151 名	1%	1%	12%	20%	66%
				86%	

2 古くから伝わるお祭りを大切にしたいと思う。

(青森市立A小学校 第4学年151名 弘前市立北小学校 第4学年69名)

	1	2	3	4	5
青森市立 A 小 計 151 名	1%	1%	9%	22%	67%
				89%	
弘前市立 北小 (事後調査) 計 69 名	2.9%	4.4%	2.9%	22.1%	67.6%
				89.7%	

3 古くから伝わるお祭りを、伝えていく必要があると思う。

(青森市立A小学校 第4学年151名 弘前市立北小学校 第4学年69名)

	1	2	3	4	5
青森市立 A 小 計 151 名	2%	1%	19%	27%	52%
				79%	
弘前市立 北小 (事後調査) 計 69 名	1.5%	2.9%	2.9%	20.6%	72.1%
				92.7%	

4 祭りの太鼓・笛・手振り鉦などのお囃子が、素晴らしいと思う。

(青森市立 A 小学校 第 4 学年 151 名)

	1	2	3	4	5
青森市立 A 小 計 151 名	3%	1%	13%	32%	51%
				83%	

5 祭りのねぶた本体・前ねぶたなどが、素晴らしいと思う。

(青森市立 A 小学校 第 4 学年 151 名)

	1	2	3	4	5
青森市立 A 小 計 151 名	0%	3%	7%	23%	68%
				91%	

5つの項目の大半において、肯定的な評価をした児童が約8割を超えていることが一番の驚きである。このように感じたのも、弘前市立北小学校は学区内に2つのねぶた団体が存在し、教育活動で「ねぶた集会」を実施するなどといったねぶたに接する機会が多い学校であることに対し、青森市立 A 小学校はねぶたに関わりがない学校であり、地域の祭りへ関わる機会の差のある小学校であるためだ。

実施校と非実施校の違いを見い出すために項目2・3で2校の比較をする。2の項目では、子どもたちが伝統文化を尊重しているかどうかを明らかにする項目であるが、2校の差は無いが9割の児童が肯定的な評価をしていることがわかる。しかし、3の項目の伝統文化を継承することの必要性を感じているかどうかを明らかにする項目では、肯定的な評価をした子どもの差は10%程度離れている。

ここで、下の図をご覧いただきたい。

・青森ねぶた祭・弘前ねぶた祭の運行への参加の有無（観覧は含まない）

	有	無
A 小学校	76	75
	50.3%	49.7%
北小学校	38	29
	56.7%	43.3%

北小学校の子どもたちの地域ねぶたを含めた祭りの参加率は明らかになっていないが、A小学校での地域ねぶたを含めた祭りへの参加率は約6割という結果であった。この結果から考えられることは、学校教育で「ねぶた・ねぶた」を取り上げることと同等に、実際のねぶ

た祭りやねぶた祭りへの参加の有無によって、伝統文化を大切にしようという心情が芽生えるのではないかということである。そして、実際に学校でねぶた・ねぶたを取り上げることで、伝統文化を継承することの必要性を感じることができるのではないかと考える。しかし、これはあくまでも仮定の話であるため、第3章では、この5つの項目を青森市立古川小学校の子どもたちを対象とした意識調査の結果と照らし合わせて、ねぶた教育が子どもたちにどのような効果を与えるかを考察していく。

第2章 青森市立古川小学校におけるねぶた教育

第1節 取り組みの概要

1項 学校紹介

青森市立古川小学校は青森市の玄関口である青森駅から約500mに位置し、駅前の商店街や青森ねぶた祭りの運行コースを学区に含む小学校である。大正15年に創立され、戦後間もなくから昭和27年頃までは40学級を越えるマンモス校であったが、学区改変や都市部のドーナツ現象によって、年々児童数が減少し、現在では児童数156名、学級数8つの小規模の学校である。当校は、平成8年に「古川市民センター」と併設する形で新設され青森県初の学社複合施設となった。学校と市民センターを扉一つで仕切られているだけで、お互いの施設を可能な限り自由に利用できるようになっている。市民センターには、体育館や室内プール、図書館、音楽室などを利用するために、古川地域の住民をはじめ、様々な地域の方々が足を運んでいる。

2項 ねぶた教育の始まり

青森ねぶた祭りの大型ねぶたを制作する小屋が集まる「ラッセランド（ねぶた団地）」や2011年に開館された青森市文化観光交流施設「ねぶたの家 ワ・ラッセ」という「青森ねぶた」に関連する施設が学区内に存在し、そして、青森ねぶた祭りの運行コースが近いといった、「青森ねぶた」を教材科しやすい小学校と考えられる古川小学校においてねぶた教育が始まったのは10年前である。

当初は、クラブ活動でねぶたの面や金魚ねぶたを作ったり、ねぶた囃子の練習をしていた活動であった。しかし、平成16年度から、当時の工藤雅士校長の提案で、「ねぶた大好き！」の名称で、総合的な学習の時間での活動に移行した。そこから本格的にねぶた活動が始まり、今年度で10周年を迎えた。

3項 活動領域

「ねぶた大好き！」活動は3学年から6学年対象に、火曜日の6校時目の総合的な学習の時間で実施される。

- ・ 古川小学校の「総合的な学習の時間」の指導の方針

「総合的な学習の時間」目標（新学習指導要領より）

横断的・総合的な学習や探求的な学習を通して、自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育成するとともに、学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探求活動に主体的、創造的、協同的に取り組む態度を育て、自己の生き方を考えることができるようにする。



総合的な学習のねらい

体験的,実践的な活動を通して,自分とのかかわりから,生活や地域社会で出会う問題を主体的・創造的に追求していく中で,ものの見方や考え方を創り上げるとともに,自分の生活をとらえ直し,生き方を考えることができる。



総合的な学習の時間の指導の方針

学び方やものの考え方を身に付け,問題の解決や探求活動に主体的に取り組もうとする子どもの育成に努める。

- (1) 子どもの興味関心を生かし,各教科で身に付けた知識・技能を相互に関連づけた学習活動の展開と工夫
- (2) 地域との交流など豊かな体験を生かした探究活動の工夫



「総合的な学習」で求める子ども像

自ら学びを創り出す学ぶ子ども

<身に付けさせたい資質や能力>

問題意識をもつ

追求し続ける

共に学び合う

課題設定においては,明確な課題意識をもてる場の工夫とその体験的な活動から子どもたちの心に強く感じるような課題を設定している。総合的な学習の時間で扱う教材の開発については,地域行事への参加や学校公開日やねぶた地域パレードといった地域との交流活動を推進する中で素材や対象を幅広く地域に求め,地域社会との関わりを生かした教材を開発している。そして,各学年の共通テーマとして,「ねぶた大好き」活動を開発した。その他にも,地域の環境・人間・文化の内容領域の教材を取り扱っている。このように地域の題材を多く取り入れている理由として,市内で唯一市民センターに併設している学校といった地域社会と関わりが持ちやすい特色を活かそうとする学校側の方針が挙げられる。

学習活動の構成としては,体験的,問題解決的な学習を主体とし,出会い,追求,表現の過程ができるような工夫がなされている。多様な学習活動ができるように学習環境の整備も進められている。学校図書館やコンピュータ室や古川市民センターの活用と地域の人材を活用している。そして,地域の教育施設の利用から小・中学校が互いに連携するようによって,それぞれを理解し,共通の視点に立った継続した指導を心がけ,併せて小学校から中学校への滑らかな接続を図るようにしている。

各学年 70 時間の中で 25 時間 を祭りに関する単元に設定している。

祭りに関する単元は各学年 1 学期の 4～8 月に行われる。

第 3 学年…「ねぶた大好き」15 時間 探求「ワラッセへ行こう」10 時間

「わたば志功になる」10 時間 「パソコンに挑戦」10 時間

「古川大好き駅前探検隊」15 時間 「世界の国からこんにちは I」10 時間

第 4 学年…「ねぶた大好き」15 時間 探求「ラッセランドへ行こう」10 時間

「めざせ都道府県博士」15 時間 「わたしたちのくらしと地域の施設」20 時間

「世界の国からこんにちは II」10 時間

第 5 学年…「ねぶた大好き」15 時間 探求「県内の祭りを調べよう」10 時間

「青森県と他の県をくらべてみよう」20 時間

「世界ダーツの旅世界の国旗・世界遺産など」10 時間 「宿泊研修」15 時間

第 6 学年…「ねぶた大好き」15 時間 探求「全国の祭りを調べよう」10 時間

「三内丸山から未来へ」15 時間「ユニバーサルデザインを見つけよう」15 時間

「修学旅行」15 時間

4 項 今年度の活動内容

活動メンバーは 3 学年から 6 学年の児童 115 名と教員 11 名の計 126 名で実施される。

今年度は一学期の中で 13 回の活動が実施された。その中でも、初回は割り当ての希望調査、2 回目は割り当てチームごとの組織会である。3 回目の活動から、太鼓チーム、横笛チーム、手ぶり鉦チーム、ねぶた制作チームの 4 つのグループに分かれて本格的にねぶた活動がスタートする。ただし、太鼓チームで活動する場合は、太鼓を叩くためのばち（1 組 2,500 円）横笛チームで活動する場合は、横笛（1 本 3,000 円）の用意が必要である。手ぶりがねチームは希望者のみ 1 組 7,000 円の手ぶり鉦の注文を受けているが、小学校にある灰皿で作ったミニ手ぶり鉦でも練習できるようになっている。準備物に費用があるため、子どもたちは家庭の人との相談をした上で、希望の活動チームを決めていく。

《太鼓チーム》

- ・活動メンバー 6 学年 11 名
- 5 学年 12 名
- 4 学年 8 名
- 3 学年 14 名
- 教員 3 名



活動の最初は、昨年度までの経験者と今年初めて太鼓の練習に加わる児童の2グループに分け、経験者は体育館で実際の太鼓を練習する。一方、初心者の子どもたちは4階オープンスペースを使用し、座布団や自分の膝を叩いて基本のリズムと節ごとの叩き方を覚える。その練習の中で叩き方を覚えた初心者グループの子どもたちは、体育館で実際に太鼓を叩く練習に加わる。体育館での練習では、太鼓を叩く際の足の幅、ばちの正しい握り方、音が途切れないような交代の仕方などの基礎的な事項から、上級者に対して節の中の強弱の付け方や大きな音の出し方といった発展的な事項まで進歩の状況によって変わる。太鼓は4つのグループの中で人数が一番多く、45分で太鼓を叩く回数が少なくなってしまうが、待ち時間は座布団や膝を叩くように指導にあたっている。指導は、県板金工業組合の囃子方"一心會"の方々が毎週指導に訪れる。

《横笛チーム》

- ・活動メンバー 6学年 8名
- 5学年 3名
- 4学年 2名
- 3学年 5名
- 教員 2名



横笛は一学期の短い期間の中で習得することは困難であることが理由であるのか、人数が少ない。だが、人数の少ない分"一心會"の横笛の指導者とマンツーマンで練習することができるため、祭に近づくにつれ上達している様子が伺えた。音を出すことに苦戦している初心者に対し、音楽室で指導者は熱心に教えており、ある程度音の出すことの可能な子どもは体育館で太鼓チームの太鼓に合わせて練習している。体育館に指導者が不在の時は、経験者である上級生の子どもたちが率先し教え合い、ねぶた囃子の上達に励んでいた。

《手ぶりがねチーム》

- ・活動メンバー 6学年 6名
- 5学年 6名
- 4学年 8名
- 3学年 7名
- 教員 3名



活動メンバーが各学年均等に配属している手ぶりがねグループ。しかし、"一心會"の手ぶり鉦の指導者の時間の都合上、一人で指導にあたることが多いため、最後の全体の音合わせの時間以外は、全員視聴覚室を主な練習の場として設定している。その分、グループのメンバー全員の息の合った演奏と「ラッセーラーラッセーラー！」の元気な掛け声が全体練習の際に目立っている。加えて、古川地域パレードや青森ねぶた祭で沿道の観客にアピールするため、跳

人のように跳ねながら、手ぶりがねを演奏する練習も取り入れている。

《ねぶた制作チーム》

- ・活動メンバー 6 学年 6 名
- 5 学年 6 名
- 4 学年 2 名
- 3 学年 11 名
- 教員 3 名



古川地域パレードねぶたと青森ねぶた合同運行において、主役になるねぶた本体の制作に携われるグループであるねぶた制作チームには、ねぶた師の立田龍宝先生が強力なバックアップをしている。前回の古川小学校での調査と変わった点は、骨組みしてあるねぶたに紙貼り作業をするだけでなく、色つけ作業を子どもたちが行う機会が増えた点である。活動場所も変更が無く、玄関前のオープンスペースにて活動が行われている。「ねぶた大好き！」の活動時間だけではなく、放課後自主的に子どもたちが立田先生のお手伝いをし、ねぶたの一足早い完成に貢献していた様子も伺えた。

5 項 古川地域パレード

今年度は7月20日の土曜日に実施された。教職員、学校PTAの方々にはねぶたの小屋出しや、太鼓の台車の最終チェック、参加賞のお菓子の準備に追われる中、続々と子どもたちは校庭に集合する。学校の体操着や半被、龍の柄の入ったシャツを着たり、頭に手ぬぐいを巻いたり、青森ねぶた祭り本番を感じさせる格好で登場する。校長先生やPTA会長のお話、囃子の指導に携わってきた方々へのお礼の言葉が行われる開会式、クラスでの記念撮影が終わるとパレードの始まりである。学校の西側からスタートし、一時間程掛けて学区の南側を練り歩く。途中学校で休憩した後、東側の学区から国道に抜けると、すっかり日が落ちる時間帯になる。低学年の子どもたちは疲れた様子で学校に戻るのに対し、高学年の子どもたちは最後の最後まで声を出して運行をする。パレード終了後は沿道の整備を担当した、駅前交番の方々へのお礼の言葉などを行い、参加賞のお菓子を持って子どもたちは帰宅する。その中、教職員、学校PTAの方々には、ねぶたの撤収作業やスピーカー、エンジンなどの分解作業に取り掛かる。

子どもたちが解散してから、約一時間後に全作業が終了し古川地域パレードは幕を閉じる。

私が今年度参加してみて感じたのは、古小応援隊をはじめとする学校PTAの方々の協力が古川地域ねぶたを支えている要因の大きな一つであるということだ。安全にパレードが終了することも、運行の際に子どもたちの列が乱れないようにロープを持つ方や、ねぶたを子どもたちと一緒に引っ張ってくれる方がいてくれるからこそであり、教職員の方々が子どもたちと楽しそうな様子で運行をしていることも、学校PTAの方々が運行内の役割を持ち、教職員

の負担を減らしているからこそ、このような様子を伺うことができたと感じる。



6項 その他のねぶた活動

- ・青森ねぶた祭への参加

青森ねぶた祭へ子どもねぶたとして、2011年に出陣を果たしてから3年目となった。今年度は8月3日に実施され、大型ねぶたと共に青森ねぶたの運行コースを練り歩いた。

- ・古川市民センターまつり、古小まつりと青森市小学校連合音楽会での囃子の発表

10月5日と6日の古川市民センターまつり・古小まつりと10月9日の連合音楽会で、5年生と6年生が囃子を披露した。発表の当日に向けた囃子の練習は、9月の下旬から放課後に実施した。



第2節 「古小ねぶた」10年間の歴史

青森市立古川小学校のねぶたへの取り組みは、当時の校長である工藤雅士氏の提案で始まった。前の勤務地の青森市立野内小学校で「青森ねぶた」に関する活動を実施し、「ねぶたがやりたい！」という理由であった。当時の樋口 PTA 会長も 2 つ返事で承諾し、PTA 会長は古川市民センター館長、古川学区 17 町会長、PTA 役員にねぶた活動の取り入れの意気込みを語ったという。

- 平成 17 年
- ・総合的な学習の時間で「ねぶた大好き！」活動の開始（市内唯一の取り組み）
 - ・三橋 光男氏の「金剛力士」で古川地域ねぶたの初陣を飾る。
 - ・現行コースでは使用されていない、旭町のトンネルを運行する。
- 平成 18 年
- ・作者が内山龍星氏に交代し、「大黒天」で 2 年目の運行
 - ・6 学年児童の半纏が完成する。
 - ・秋に学習発表会の広報活動のため、古川の市場でねぶたを披露する。
- 平成 19 年
- ・作者が立田健太氏（現・立田龍宝氏）に交代する。題材は「鬼若丸」
 - ・古川小創立 80 周年、古川市民センター10 周年記念のため、
3 台のねぶたが運行される。
- 平成 20 年
- ・学校統廃合の問題が勃発し、古川地域パレードで署名活動が行われる。
 - ・題材「鏡獅子」
- 平成 21 年
- ・題材「日本武尊」
- 平成 22 年
- ・東北新幹線新青森駅開業を記念し、子どもたちの紙貼りした
「新幹線ねぶた」が運行される。
 - ・突然の豪雨により、7 年目にして初の中止が決定
 - ・題材「鍾馭」
- 平成 23 年
- ・東日本大震災の影響で中止が囁かれる中、
青森ねぶた祭りの開催を受けて例年通り開催
 - ・5 月 1 日「ワ・ラッセ」前で復興イベント「けっばれ東北」を開催
 - ・青森ねぶた祭りへの初参加を果たす。題材は「大江山」
- 平成 24 年
- ・校庭のバックネット隣にねぶた小屋が完成する。
 - ・青森市小学校連合音楽会でねぶた囃子を披露
- 平成 25 年
- ・古川地域ねぶた 10 周年を迎える。題材「象引」

第3章 児童を対象とした「青森ねぶた」に関する意識調査と ねぶた教育が与える子どもへの影響

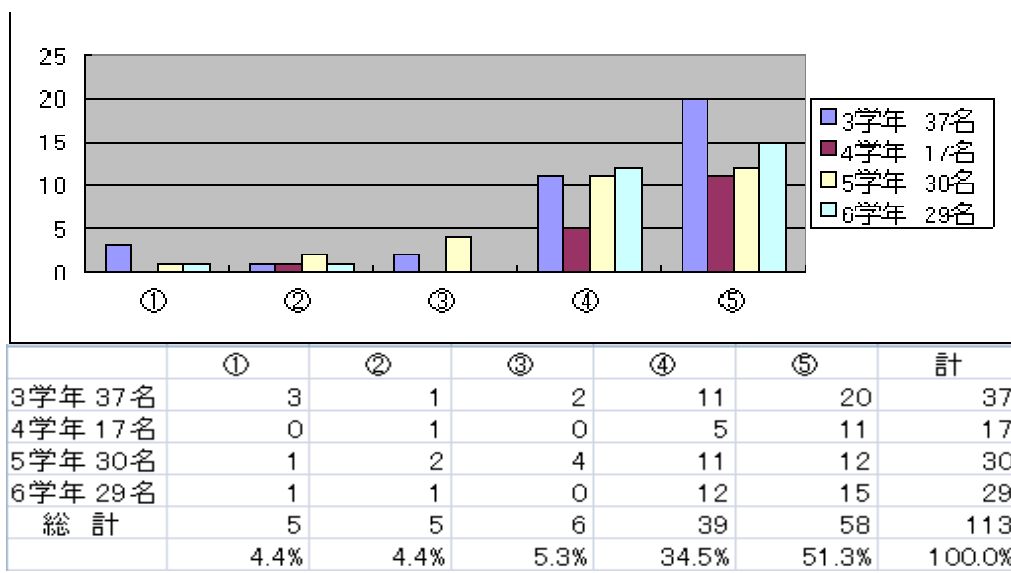
第1節 児童対象アンケート調査

ここでは、2013年12月に青森市立古川小学校第3学年～第6学年（特別支援学級含む）113名へ実施した、「青森ねぶた」に関する意識調査(10項目)の結果を紹介していく。

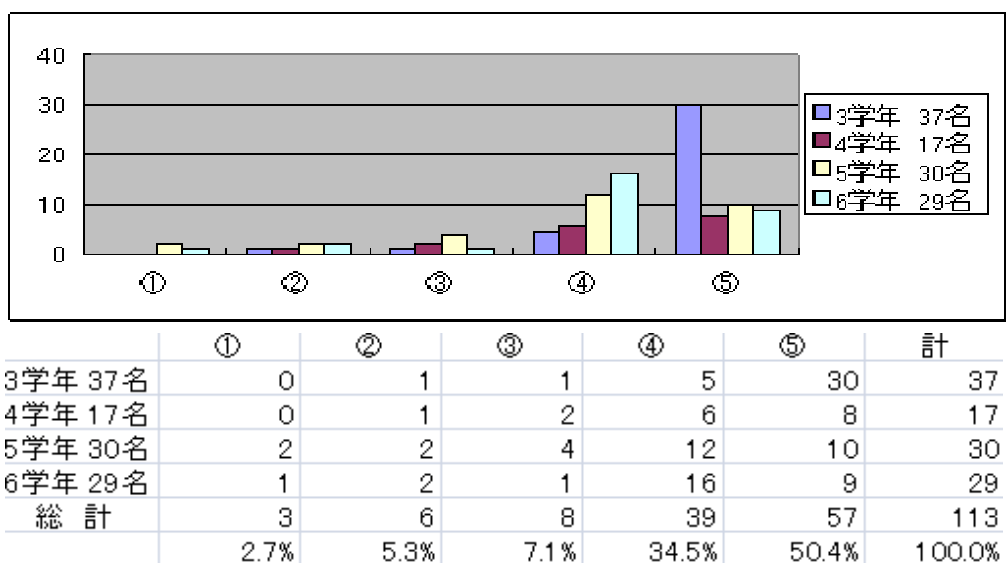
1項 児童対象アンケート調査結果

1. 「青森ねぶた」は他の県の人たちにも、じまんすることのできるお祭りである。

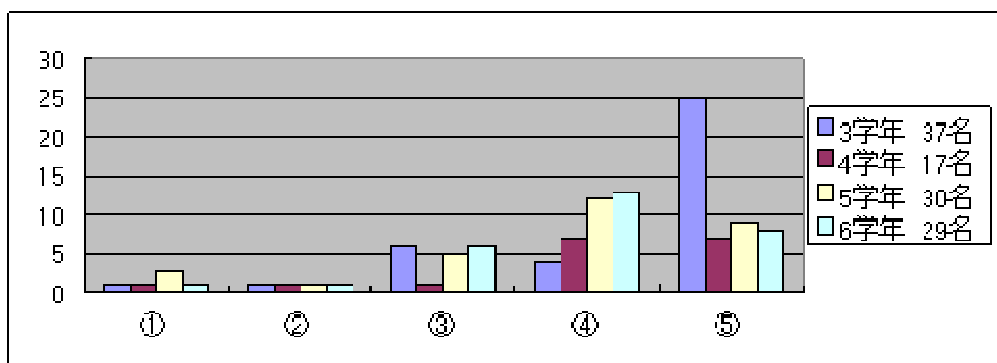
①=そう思わない ②=どちらかといえばそう思わない ③=どちらでもない
④=どちらかといえばそう思う ⑤=強くそう思う=④+⑤を肯定的と評価



2. ねぶたを作ったり,おはやしのれんしゅうをする「ねぶた大好き」活動は楽しい。

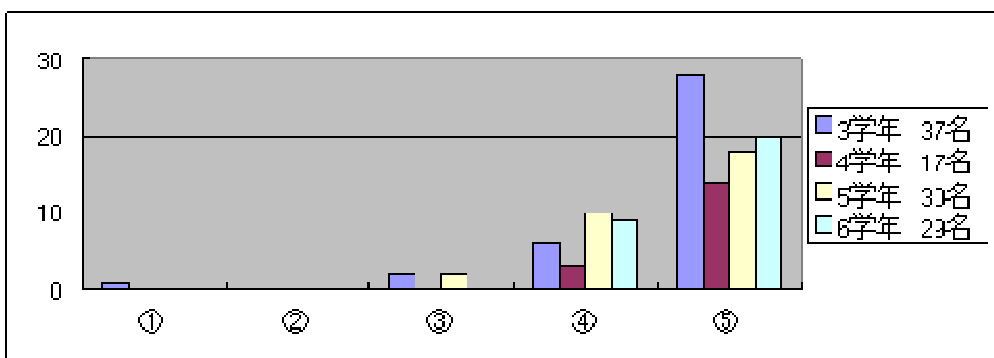


3. 地いきパレードや青森ねぶたまつりへ出ることは楽しい。



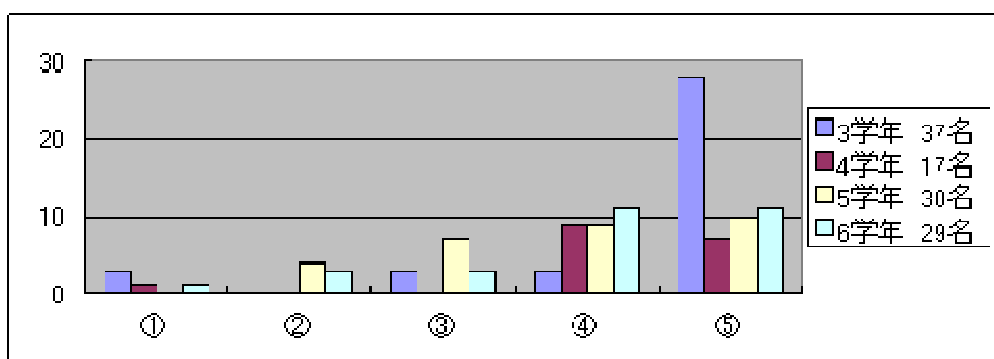
	①	②	③	④	⑤	計
3学年 37名	1	1	6	4	25	37
4学年 17名	1	1	1	7	7	17
5学年 30名	3	1	5	12	9	30
6学年 29名	1	1	6	13	8	29
総計	6	4	18	36	49	113
	5.3%	3.5%	15.9%	31.9%	43.4%	100.0%

4. むかしからのお祭りである「青森ねぶた」を大切にしたいと思うひつようがある。



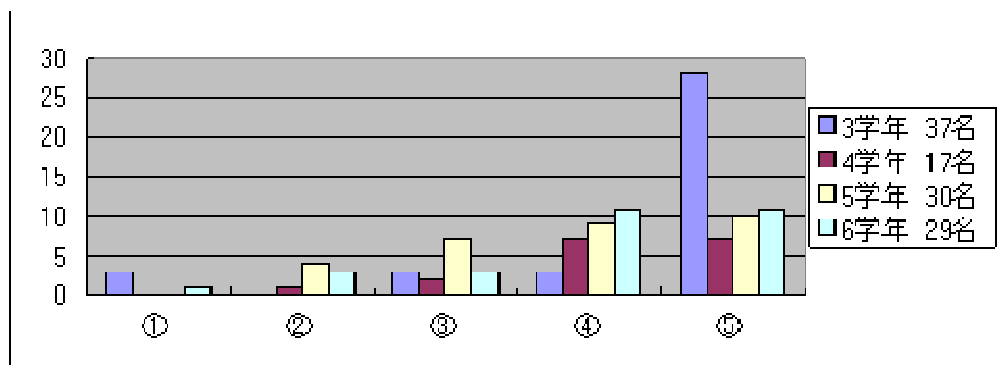
	①	②	③	④	⑤	計
3学年 37名	1	0	2	6	28	37
4学年 17名	0	0	0	3	14	17
5学年 30名	0	0	2	10	18	30
6学年 29名	0	0	0	9	20	29
総計	1	0	4	28	80	113
	0.9%	0.0%	3.5%	24.8%	70.8%	100.0%

5. みんなに「青森ねぶた」というまつりをつたえていくひつようがある。



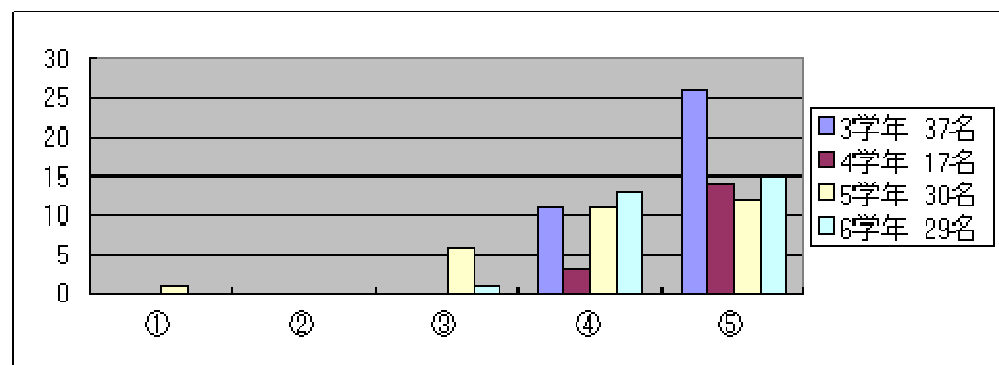
	①	②	③	④	⑤	計
3学年 37名	3	0	3	3	28	37
4学年 17名	1	0	0	9	7	17
5学年 30名	0	4	7	9	10	30
6学年 29名	1	3	3	11	11	29
総計	5	7	13	32	56	113
	4.4%	6.2%	11.5%	28.3%	49.6%	100.0%

6. 「青森ねぶた」が大好きである。



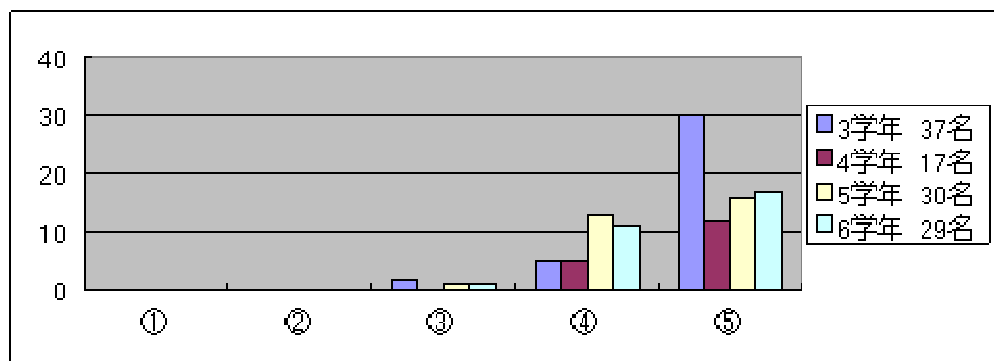
	①	②	③	④	⑤	計
3学年 37名	3	0	3	3	28	37
4学年 17名	0	1	2	7	7	17
5学年 30名	0	4	7	9	10	30
6学年 29名	1	3	3	11	11	29
総計	4	8	15	30	56	113
	3.5%	7.1%	13.3%	26.5%	49.6%	100.0%

7. ねぶたまつりの、たいこ・ふえ・かねのおはやしはすばらしいと思う。



	①	②	③	④	⑤	計
3学年 37名	0	0	0	11	26	37
4学年 17名	0	0	0	3	14	17
5学年 30名	1	0	6	11	12	30
6学年 29名	0	0	1	13	15	29
総計	1	0	7	38	67	113
	0.9%	0.0%	6.2%	33.6%	59.3%	100.0%

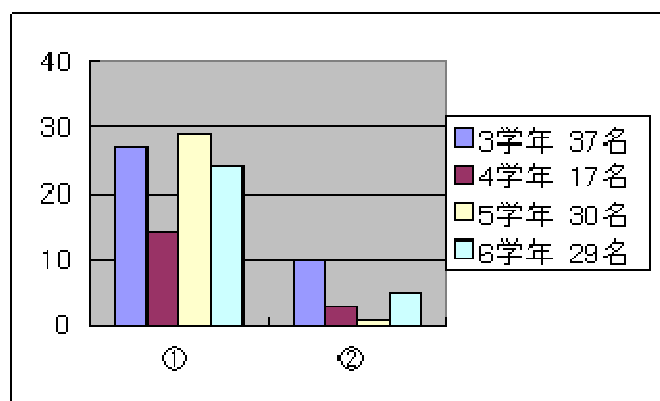
8. ねぶたまつりのねぶた本体はすばらしいと思う。



	①	②	③	④	⑤	計
3学年 37名	0	0	2	5	30	37
4学年 17名	0	0	0	5	12	17
5学年 30名	0	0	1	13	16	30
6学年 29名	0	0	1	11	17	29
総計	0	0	4	34	75	113
	0.0%	0.0%	3.5%	30.1%	66.4%	100.0%

9. 学校の授業のほかに「ワ・ラッセ」や「ラッセランド」(ねぶた小屋)に
行ったことはありますか？

① ある ② ない



	①	②	計
3学年 37名	27	10	37
4学年 17名	14	3	17
5学年 30名	29	1	30
6学年 29名	24	5	29
総計	94	19	113
	83.2%	16.8%	100.0%

10. 「ねぶた大好き」の活どうを

もっと楽しくするためのアイデアがあったら書いてください。

- ・ねぶたのデザインを子どもたちだけで考える。(題材の決定)
- ・ゆるキャラがくればよい。
- ・自分の顔を作る。(自分の顔のねぶたの製作)
- ・もっと長い時間やりたい。(活動時間の増加)

- ・おでん売り場やチョコバナナ売り場があるとよい。(屋台の出店)
- ・紙を貼る活動を多くする。
- ・ロープを持っている人が「ラッセーラーラッセーラー」と掛け声を出せばよい。
- ・太鼓の出番ではない人は掛け声をかけたり、はねたりするとよい。
- ・ねぶたの題材を青森県に関係したものにする。
- ・ねぶた制作の人で太鼓、笛、鉦のどれかをやったことがある人は、
ねぶたを引っぱるだけでなく、囃子にも参加できるようにする。(種目の自由化)
- ・相手のいいところを見つけながら活動する。
- ・準備を早く済ませる。
- ・みんなで協力するといいと思う。
- ・盛り上がるねぶたの曲をつくる。
- ・先生も一緒に練習する。
- ・古小のキャラクターをつくり、それをねぶたにして広める。
- ・中学年以上の活動のため、2週間に1回全校で演奏をすればよい。
(本番以外に全校で盛り上がる。)
- ・いろいろな人たちにねぶた制作のすばらしさを伝えるために体験の機会を設ければよい。
- ・低学年や地域の人たちも月に1度招いて、ねぶたばやしの発表会をする。
- ・ねぶたの由来を教えてもらう。
- ・これからねぶた活動をする子どもたちに、今までのねぶたの映像を見せたら
盛り上がる感じる。
- ・囃子の練習では、レベルが上がるごとにシールを貯めていくことや、
出来た所ごとにシールを貯めていったりすることで
低学年の子どもたちも楽しく練習ができると思う。

2項 児童対象アンケート考察

本研究での児童対象アンケートでは10の項目を設定し意識調査を実施した。アンケート調査では段階を①～⑤の5つに分類し、④「どちらかといえばそう思う」と⑤「強くそう思う」を肯定的と評価し考察していく。集計結果を簡略に分析すると、1～8の質問への肯定的な評価は約8～9割の結果であり、全て高い数値が表れていると言い切れるであろう。そして9の項目、学区内に立地している、青森ねぶた祭りの大型ねぶたを制作する小屋が集まる「ラッセランド(ねぶた団地)」や2011年に開館された青森市文化観光交流施設「ねぶたの家ワ・ラッセ」へ個人的に見学をしたことがある子どもは約8割存在していることが明らかになった。

質問1と4～8は第2節で先行調査と比較するため、ここでは質問2・3・9・10の考察をしていく。

まず、質問 2 と 3 である。この項目では、子どもたちにとって「ねぶた大好き！」活動でいうねぶた制作やお囃子の練習が楽しい活動であるのか、又は地域パレードや青森ねぶた合同運行が楽しい活動であるのかを尋ねた。「ねぶた大好き！」活動を楽しい活動であると肯定的な評価をした子どもは 85%であり、地域パレードなどの運行が楽しい活動であると肯定的な評価をした子どもは 75%であった。運行よりも制作・練習が楽しいと感じる子どもが多いということが明らかになった。

次は質問 9 の考察である。「ラッセランド」「ワ・ラッセ」この 2 つの施設を学校の授業の中で行ったことがあるのにも関わらず、個人的に見学する子どもが多数存在することには 2 つの理由が考えられる。1 つ目として、先程の文面にも書き示したのであるが、学区内にこの 2 つの施設があることである。休日を利用して友達と遊びに出掛けたり、立地している場所が近場であるため、家庭の方と気軽に立ち寄ることができると考えられる。2 つ目は見学料金を必要としないことである。多くの大型ねぶたの制作風景を見学できる「ラッセランド（ねぶた団地）」は小屋の入口のわずかな隙間から、祭り本番に近づくにつれて完成に近づいていくねぶた本体を見ることができる。そして、大型ねぶた 5 台を展示し、ねぶたの歴史や祭りの移り変わりを知ることができる多数の資料が存在する「ワ・ラッセ」も青森市内の小・中学生は証明書を持参することによって無料で入館できる。この 2 つが対象となった子どもたちの高い施設利用状況に繋がったと考える。

質問 10 の自由記入欄から「ねぶた大好き！」活動内での子どもたちの意見から考察していく。

ねぶた制作グループでは、紙貼り活動の機会を増やすことや、ねぶたの題材を子どもたち自身で決めたいという意見があった。この意見から、子どもたちが主体となった制作活動を行っていくべきであると考え。難しいかもしれないが、子どもたちに制作を任せる部分や小さい前ねぶたを子どもたちの手だけでなるべく作り上げることが可能であるならば、機会を設けて頂きたいと思う。

囃子のグループにおいては、低学年や地域の方々への囃子の発表会を望む意見があった。発表会を開くことで、青森ねぶたを伝承することの大切さに子どもたちが気づくかもしれない上に、これから「ねぶた大好き！」活動に加わる低学年へねぶた活動への見通しを持たせる活動になると考える。高学年から低学年へ、太鼓・笛・手振り鉦各種目を演奏する際のポイントの説明をする活動も取り入れることで、異年齢間での人間関係の構築を学ぶ機会であることに加え、低学年の子どもたちが本当にやってみたい種目に気づくかもしれないと考える。そして、「囃子の練習では、レベルが上がるごとにシールを貯めていくことや、出来た所ごとにシールを貯めていったりすることで低学年の子どもたちも楽しく練習ができると思う。」という子どもたちの意見から、教員の方々とねぶたの指導者間で話し合いを行い、子どもたちの意欲を向上させるための工夫を施すべきであると考え。

そして制作グループと囃子グループの両方に該当する、「ねぶた制作の人で太鼓、笛、鉦のどれかをやったことがある人は、ねぶたを引っぱるだけでなく、囃子にも参加できるようにす

る」という意見があるように,制作班の子どもたちがお囃子の練習したり,逆に囃子班の子どもたちが制作・ねぶたの運行をしたりといった様々な体験をさせることによって,子どもたちも更に楽しいと実感できる活動になると考える。

第2節 ねぶた教育が与える子どもへの影響についての考察

ここでは、第1章の第3節で紹介した青森市内のA小学校第4学年151名対象の調査と2011年度に弘前市立北小学校の第4学年69名対象に実施された「ねぶたに関する意識調査」で明らかになった5つの項目の結果と青森市立古川小学校児童対象の意識調査の結果を比較していく。

1= そう思わない,2= どちらかといえばそう思わない,3= どちらでもない,
4= どちらかといえばそう思う,5= 強くそう思う= 4+5 を肯定的と評価

1項 青森ねぶたに対する誇り

青森市立A小学校での「青森ねぶたが、日本有数の祭りだと思う。」と本調査での「青森ねぶたは他の県の人たちにも、じまんすることのできるお祭りである。」の質問項目から、「青森ねぶた」に対する誇りの有無を明らかにした子どもたちの意識調査結果を、ねぶた教育の実施校と非実施校の二校間で比較をする。

	1	2	3	4	5
古川小 113名	4.4%	4.4%	5.3%	34.5%	51.3%
				85.8%	
A小 151名	1%	1%	12%	20%	66%
					86%

(表1 「青森ねぶた」に対する誇りの有無)

A小学校と古川小学校の両校で肯定的な評価をした児童の割合は約86%となった。ねぶた教育の実施校と非実施校で肯定的な評価の割合が同等になったことの要因については、地域・青森ねぶた祭りの観覧の有無が関係しているのではないかと考える。観覧の有無を確かめるデータが無いものの、古川小学校のほとんどの児童は地域パレード・青森ねぶた祭りへの参加をしており、実際に祭自体の雰囲気を楽しんでいる。そして、A小学校の児童の地域・青森ねぶた祭りの観覧状況は2005年11月の調査(表2)によると、観覧経験のある児童は95%の結果が明らかになっている。数値には表れていないのではあるが、ねぶた教育を実施することでも「青森ねぶた」に対する誇りを形成できると考えるが、この結果から、地域ねぶたや青森ねぶた祭りを観覧することが「青森ねぶた」に対する誇りを形成する素地になるのではないかと考察した。

	有(人)	有(%)	無(人)
A小学校151名	144	95	8

(表2 青森市立A小学校4学年 地域ねぶた・青森ねぶた祭りの観覧状況)

2 項 伝統文化の尊重と伝統継承の意識

青森市立 A 小学校と弘前市立北小学校での「古くから伝わるお祭りを大切にすることがあると思う。」「古くから伝わるお祭りを、伝えていく必要がある。」と本調査での「むかしからの祭りである青森ねぶたを大切にしたいと思う。」「みんなに青森ねぶたというまつりをつたえていく必要がある。」の質問項目から、伝統文化の尊重と伝統継承の意識を明らかにした子どもたちの意識調査結果を、ねぶた・ねぶた教育の実施校と非実施校の3校間で比較をする。

	1	2	3	4	5
古川小 113 名	0.9%	0%	3.5%	24.8%	70.8%
				95.6%	
A 小 151 名	1%	1%	9%	22%	67%
				89%	
北小 69 名 (事後調査)	2.9%	4.4%	2.9%	22.1%	67.6%
				89.7%	

(表 3 古くから伝わるお祭りを大切にすることの必要性)

	1	2	3	4	5
古川小 113 名	4.4%	6.2%	11.5%	28.3%	49.6%
				77.9%	
A 小 151 名	2%	1%	19%	27%	52%
				79%	
北小 69 名 (事後調査)	1.5%	2.9%	2.9%	20.6%	72.1%
				92.7%	

(表 4 古くから伝わるお祭りを伝えることの必要性)

まず、表 3 の古くから伝わるお祭りを大切にすることの必要性、伝統文化の尊重に関する意識調査を比較する。肯定的な評価をした児童の割合は、古川小 95.6% A 小学校 89% 北小学校 89.7% であった。古川小学校は、肯定的な評価の割合が 2 校よりも高いということがわかる。この数値に関して、第 1 章第 3 節で、地域ねぶたを含むねぶた祭りへの参加が伝統文化を尊重する心情を育てるのではないかと仮定と照らし合わせて考察していく。

肯定的な評価の割合が高いことの要因として、「運行」の活動が充実していることが考えられる。第 1 章第 3 節において、A 小学校、北小学校の児童のねぶた・ねぶた運行への参加率は 6 割から 7 割ということが明らかになった。しかし、古川小学校では「古川地域パレード」「青森ねぶた合同運行」の 2 回の運行がねぶた活動内で実施されているため、2 回とも欠席していない限り、全校児童が運行の経験をしたことがあるということになる。3 校の比較から「お祭りへの参加」が伝統文化を尊重する気持ちを育てることに繋がるのではないかと考察し

た。このことから、ねぶた活動に「運行」を取り入れることが、伝統文化を尊重する気持ちを向上させる効果があると言えるであろう。

次に、表4から古くからのお祭りを伝えていくことの必要性、伝統文化の継承に関する意識調査を比較すると、肯定的な評価をした児童の割合は、古川小 77.9% A小学校 79% 北小学校 92.7%であった。この結果が表れた要因として、表現活動が充実していることが考えられる。これは、北小学校のねぶた活動の概要を調査したところ、弘前市立北小学校の取り組みでは、「ねぶた集会」という存在があることがわかった。その「ねぶた集会」では教員や地域住民、保護者に対し、制作した作品やねぶたの歴史、囃子を調べたものを発表する活動が設けられている。このような、祭りの歴史や現状を子どもたち自身で調べ、発表する機会を設けることで伝統文化を継承する意識を向上させるのではないかと考える。私は古川小学校の地域パレードのような運行内で囃子を披露することも「ねぶた集会」のような発表会と同じ活動であると考えていたが、肯定的な評価の割合はねぶた教育を実施していないA小学校と差が無かった。これは祭り自体を楽しむことで、沿道の方々へ披露するという意識を忘れてしまうことが一つの要因なのではないかと考える。そのため、祭りの歴史や現状を子どもたちと自身で調べ、発表する機会を設けることで、伝統文化を継承する意識を向上させることができるのではないかと考える。

3項 「青森ねぶた」そのものに対する意識

青森市立A小学校での「祭りの太鼓・笛・手振り鉦などのお囃子が、素晴らしいと思う。」「祭りのねぶた本体・前ねぶたなどが、素晴らしいと思う。」と本調査での「ねぶたまつりの、たいこ・ふえ・かねのおはやしは素晴らしいと思う。」「ねぶたまつりのねぶた本体は素晴らしいと思う。」の質問項目から、「青森ねぶた」そのものに対する意識を明らかにした子どもたちの意識調査結果を、ねぶた教育の実施校と非実施校の二校間で比較をする。

	1	2	3	4	5
古川小 113名	0.9%	0%	6.2%	33.6%	59.3%
				92.9%	
A小 151名	3%	1%	13%	32%	51%
				83%	

(表5 囃子は素晴らしいものである。)

	1	2	3	4	5
古川小 113名	0%	0%	3.5%	30.1%	66.4%
				96.5%	
A小 151名	0%	3%	7%	23%	68%
				91%	

(表6 ねぶた本体は素晴らしいものである。)

まず表 5 から、青森ねぶたを盛り上げる太鼓・笛・手振り鉦の囃子を素晴らしいものであると肯定的な評価をした児童の割合は、古川小 92.9% A小 83% 表 6 から、ねぶた本体は素晴らしいものであると肯定的な評価をした児童の割合は、古川小 96.5% A小 91%であった。この結果が表れた大きな要因は、ねぶた活動の実施校と非実施校の違いと考えられる。ねぶたを制作したり、お囃子の練習をしたりする体験を伴った活動をすることによって、ねぶた本体・お囃子が素晴らしいと感じることができるのであろうと考える。

ここで、もう一つ明らかになったことは、囃子よりもねぶた本体に対して素晴らしいと感じる子どもが多いということである。やはり、ねぶた祭りの主役である、ねぶた本体に対する関心が大きいと考えられる。

第4章 保護者・地域住民・教員対象の ねぶた教育に関する意識調査

第1節 保護者対象アンケート調査

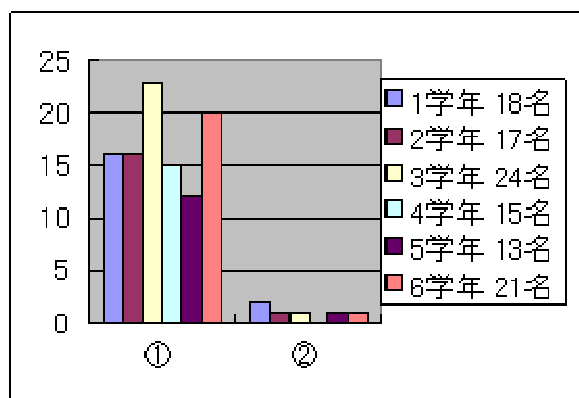
1項 保護者対象アンケート調査結果

ここでは、青森市立古川小学校の保護者第1学年～第6学年(特別支援学級含む) 108 の家庭数に配布したアンケートの結果を紹介する。

第3章これまで「古小ねぶた」地域パレード(今年度7/20実施)に

参加・観覧したことがある。

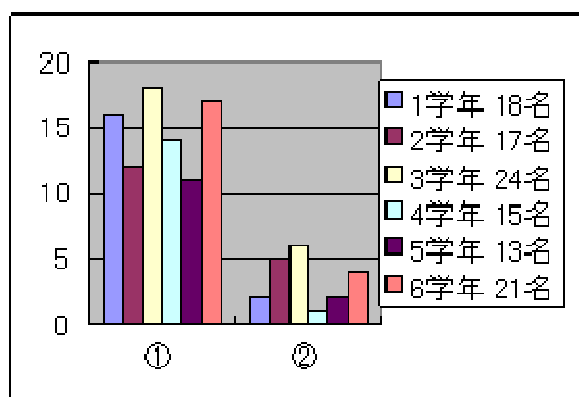
① はい ② いいえ



	①	②	計
1学年 18名	16	2	18
2学年 17名	16	1	17
3学年 24名	23	1	24
4学年 15名	15	0	15
5学年 13名	12	1	13
6学年 21名	20	1	21
総計	102	6	108
	94.4%	5.6%	100.0%

第4章これまで「古小ねぶた」青森ねぶた祭り合同運行(今年度8/3実施)に

参加・観覧したことがある。



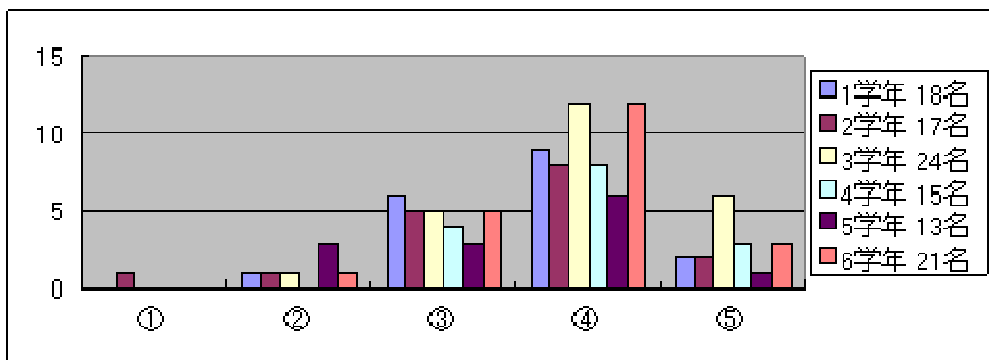
	①	②	計
1学年 18名	16	2	18
2学年 17名	12	5	17
3学年 24名	18	6	24
4学年 15名	14	1	15
5学年 13名	11	2	13
6学年 21名	17	4	21
総計	88	20	108
	81.5%	18.5%	100.0%

3. 「古小ねぶた」の活動を通して、学校との関わり持つことが

できるようになったり、関わる機会が増えたりしたと思う。

①=そう思わない ②=どちらかといえばそう思わない ③=どちらでもない

④=どちらかといえばそう思う ⑤=強くそう思う

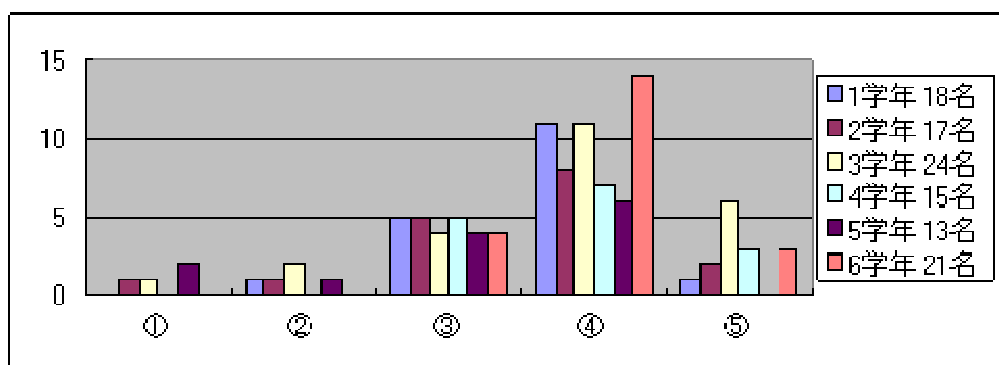


4.

	①	②	③	④	⑤	計
1学年 18名	0	1	6	9	2	18
2学年 17名	1	1	5	8	2	17
3学年 24名	0	1	5	12	6	24
4学年 15名	0	0	4	8	3	15
5学年 13名	0	3	3	6	1	13
6学年 21名	0	1	5	12	3	21
総計	1	7	28	55	17	108
	0.9%	6.5%	25.9%	50.9%	15.7%	

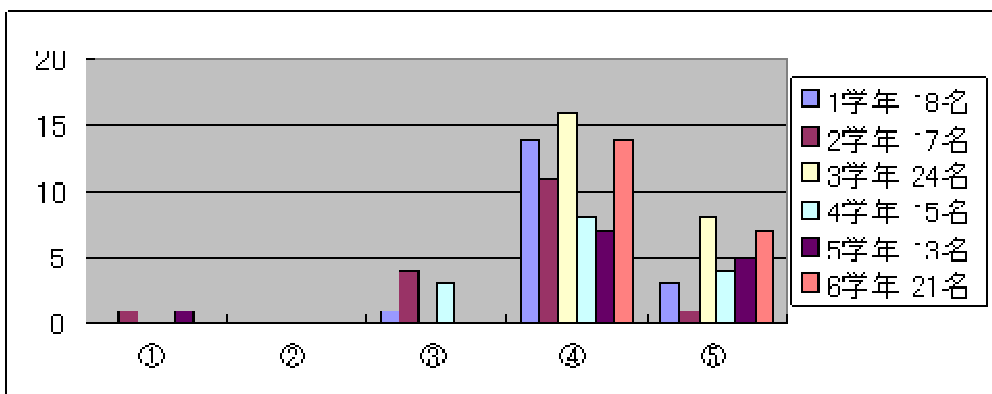
「古小ねぶた」の活動を通して、他の保護者様同士との関わりを持つことが

できるようになったり、関わる機会が増したりしたと思う。



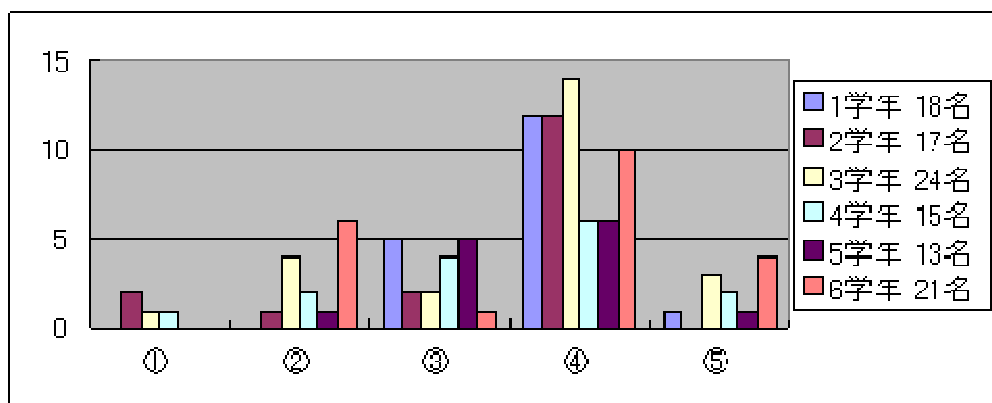
	①	②	③	④	⑤	計
1学年 18名	0	1	5	11	1	18
2学年 17名	1	1	5	8	2	17
3学年 24名	1	2	4	11	6	24
4学年 15名	0	0	5	7	3	15
5学年 13名	2	1	4	6	0	13
6学年 21名	0	0	4	14	3	21
総計	4	5	27	57	15	108
	3.7%	4.6%	25.0%	52.8%	13.9%	

5. 学校現場において、地域の伝統文化を取り入れることは必要であると思う。



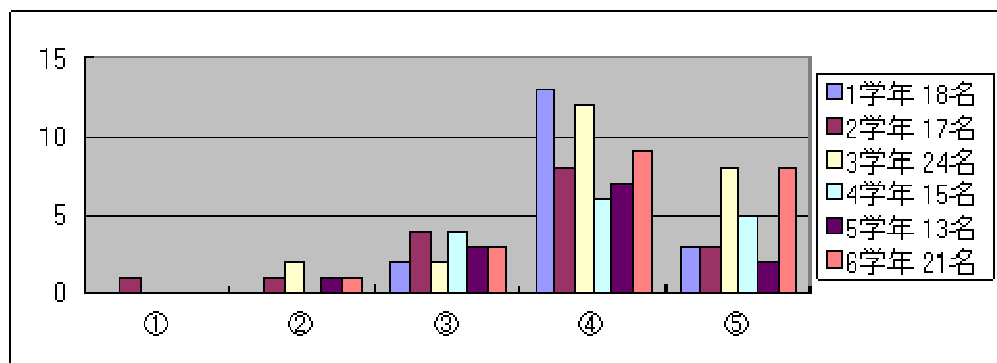
	①	②	③	④	⑤	計
1学年 18名	0	0	1	14	3	18
2学年 17名	1	0	4	11	1	17
3学年 24名	0	0	0	16	8	24
4学年 15名	0	0	3	8	4	15
5学年 13名	1	0	0	7	5	13
6学年 21名	0	0	0	14	7	21
総計	2	0	8	70	28	108
	1.9%	0.0%	7.4%	64.8%	25.9%	

6. 時間の都合が合うのであれば、製作・雛子の活動に携わりたいと思う。



	①	②	③	④	⑤	計
1学年 18名	0	0	5	12	1	18
2学年 17名	2	1	2	12	0	17
3学年 24名	1	4	2	14	3	24
4学年 15名	1	2	4	6	2	15
5学年 13名	0	1	5	6	1	13
6学年 21名	0	6	1	10	4	21
総計	4	14	19	60	11	108
	3.7%	13.0%	17.6%	55.6%	10.2%	

7. 今後も「古小ねぶた」を続けていくべきある。



	①	②	③	④	⑤	計
1学年 18名	0	0	2	13	3	18
2学年 17名	1	1	4	8	3	17
3学年 24名	0	2	2	12	8	24
4学年 15名	0	0	4	6	5	15
5学年 13名	0	1	3	7	2	13
6学年 21名	0	1	3	9	8	21
総計	1	5	18	55	29	108
	0.9%	4.6%	16.7%	50.9%	26.9%	

8. 「古小ねぶた」をより良いものにするためのアイデアがございましたら

お書きください。

(1学年保護者)

- ・地域パレードに参加してみて2時間くらいは歩いたと思うのですが、低学年には体力的にすごく辛いと感じました。集中力もなくなる上、苦痛になると思います。もう少しパレードの範囲を縮小してみたらどうか？
- ・地域の方々も気軽に参加でき、製作や囃子に携われる事はとても素晴らしいことであり、古小の児童達の囃子も見事です！参加者をもっと増やすために、町会で参加者を募るなどといった活動をしていけばいいかなと思います。
- ・製作も囃子も数と質を保つ必要があるので、まず、子どもたちが興味を持つように1~2回でもねぶたの授業で体験して次へつなげる方法をとってほしいと思います。
- ・古川小学校は親が関わる行事が多すぎる、子どものためといって負担ばかり増やされても… その中でも、特徴的な古川小ねぶたにPTAの力を集中させればもっと良いものになると思う。
- ・ハネトがただ歩いているという感じだったので、観客も参加してるハネトも盛り上がりがいまいちだったような気がします。振り付けまではしなくてもいいと思うが、見本というか手本になる人がいればよいのでは。
- ・高学年はほとんど囃子の練習しているように、低学年にも「はねと」を練習する時間を何回か設けた方が良く思う。

(2 学年保護者)

- ・在校生が少なくなっているなので、卒業生にも参加をたくさんしてもらいたい。

(3 学年保護者)

- ・保護者の負担は大きい。組織の立ち上げが難しいように思うが、学校・保護者・OBを含む地域の方々が協力して運行していけたら負担が減るのでは。
- ・我が家には「ねぶた文化」が無いせいか、子どもたちのノリが悪い。日頃の練習から"一致団結"するような雰囲気が高まればもっと楽しいのになと想像します。
- ・はねとの衣装が厳密すぎるため、参加するハードルが高すぎる気がします。合同運行でも、もう少しゆるくしてもらえれば参加する人が増えるのでしょうか。(半纏 OK とか?)
- ・ねぶたも囃子もとても楽しい。一体感を出すためにハネトの人達がもっと元気に声を出すと、更に良くなるのでは。
- ・大勢の人が、積極的に関わるようにしてほしい。
- ・人数が少なくなっているなので、卒業生や地域の方々、町内の方々いろいろな協力が必要だと思います。

(4 学年保護者)

- ・地域との密着も必要だと思う。
- ・地域パレードの時は特に思わなかったのですが、合同運行の時に跳人が少ないのが気になりました。囃子に力を入れたいところですが跳人の呼びかけも必要ではないかと思えます。
- ・「地域に開かれた古小ねぶた」にする為には、地域の人たちが「古小ねぶた」を待ちわびるようなイベントにしていく事が大切に思われます。参加したい人に規制をあまり加える事なく受け入れる体制などを運営される方は考慮いただければ更に楽しいイベントになるかと思えます。

(5 学年保護者)

- ・ただ歩いている人が多すぎると思う。
- ・保護者のお囃子への参加を募る方が良いと思う。練習は午前の部(ねぶた大好きの時)と夜の部と分けても良いのでは。
- ・学校現場に限らず地域のねぶたの好きな人、興味のある人などがやって強制ではない方が良いと思う。

(6 学年保護者)

- ・囃子の練習が5~7月限定なので、もっと早い時期からあると助かる。

- ・特定の人だけ、頑張った人だけのお祭りにしないように、みんなで楽しめる雰囲気づくりを考えてほしい。
- ・ねぶた製作の過程や囃子の様子を月毎や、その時々にもっと公開して多くの人に知ってもらう工夫をしてみたらどうでしょう。加えて、ねぶたがどの様に出来上がってきているのか、囃子には何人位の人が集まって、どの様な練習をしているのか、詳しく紙面などで知らせていけば興味を持つ人も増えていくのではないでしょう。
- ・入学時の学校紹介の際に、実際に行われた地域パレードやリンクステーションでの発表の様子を上映して新入生に興味を持たせたり、もう少し楽しく練習したり、いろんな楽器に触れさせる。

2項 保護者アンケート調査の考察

保護者用アンケートは7つの項目で実施した。そして質問8には、「古小ねぶた」をより良い活動とするための意見を求めるため、自由記入欄を設けたところ、多数のねぶた活動に対する意見や感想を聞くことができた。この貴重な意見や感想をこれからの「古小ねぶた」の活動に活かしたり、今後自身のねぶた教育実施のためのデータとして活用していきたい。また、保護者アンケートも段階を①～⑤の5つに分類し、④（そう思う）と⑤（強くそう思う）を肯定的と評価し考察を進めていく。

まず、質問1と2の項目では、保護者の古川地域パレードと青森ねぶた合同運行への参加状況が明らかになった。学区内を練り歩く古川地域パレードは約9割であり、ほとんどの保護者が一度は参加・観覧している状況である。そして、青森ねぶた合同運行では約8割の保護者が参加・観覧したことがあるという結果であった。この数値には、学校側が保護者の方々に参加を促している努力が表されている。加えて、保護者へ運行の際に沿道の安全確保やねぶたの引き手、提灯持ちなどといった役割を与えており、そのために参加していることもこの高い参加率に影響していると考えられる。

質問3・4では、ねぶた教育が与える影響の新しい視点として、学校と保護者を繋ぐ架け橋となるという可能性を明らかにするために設定した項目である。学校側・他の保護者同士での関わりを少しでも持つことができた、関わる機会が増えた。という肯定的な評価をした保護者は6割近く存在した。詳細な結果としては、学校側との関わりを少しでも持つことができた、関わる機会が増えたと答えた保護者は66.6%、他の保護者との関わりを少しでも持つことができた、関わる機会が増えたと答えた保護者は66.7%であった。

学校と保護者が関わる代表的な機会として挙げられるのは、学校行事（入学式・運動会・学習発表会・学校バザー・卒業式など）や参観日、親子レクリエーションがある。子どもたちに対する深い理解はもちろん必要である。しかし、同等に保護者に対する理解や連携も学級経営を行っていく上で重要視しなければならない。いじめや不登校の言葉を頻繁に耳にする世の中であるため、このような問題が起こった際は保護者との強い連携が解決の糸口に

なるはずである。そのため、ねぶた活動は新学期が始まって早い段階で学校と保護者との関係性、保護者同士の関係性を構成していくことに強く貢献できる活動にもなり得ると考える。

質問 5 では、学校において伝統文化を取り入れていることに対して保護者はどのように考えているのかを調査するために設定した。伝統文化を取り上げることよりも子どもたちの学力を形成するための教育活動を望む保護者が多く存在するかもしれないと予想していたが、肯定的な評価は 90% 近くに及ぶ結果になり予想外の結果であった。しかし、実際に古川地域パレードや青森ねぶた祭りでの運行の様子を見学し、保護者の方々の尽力している姿を見ているとこの結果は納得できる。青森ねぶた祭りが開催される地域の土地柄がこのような結果を表したと考える。

質問 6 では、ねぶた制作やねぶた囃子を体験してみたいと肯定的な評価をしていた保護者の方は 66% ということが明らかになった。しかし、ここでも④の割合が高いことがわかる。時間的な都合が「ねぶた大好き！」活動への保護者の参加率を左右する要因であるが、子どもと共に活動をすることで、家庭での共通の話題ができるはずである。放課後に囃子の練習会があるように、保護者の方々が参加しやすい時間帯を探し、制作に携われるような環境づくりや声掛けをしていくべきであると考えます。

アンケート調査より、ねぶた活動は学校と保護者、保護者同士との関わりに貢献していることが明らかになったことは大きな収穫である。しかし、問題面と考えられるのは、地域住民との密着を望んでいる保護者もいたということである。古川小学校のねぶた活動では、地域住民がもっと関わるような取り組みを行い、相互理解を深める方法を模索していかなければならない。自由記入欄の中で、運行時保護者の負担が大きすぎるという声を頂いた。

そのため、市民センターへの呼びかけや町内会を伝って地域の住民への協力をもっと呼びかけるべきであると考えます。熱心に協力をしてくれる人が存在するに違いない。そして、土地柄上、「青森ねぶた」を昔から見てきたという方も中にはいるはずである。その人を招いて、「青森ねぶた」に関する講話をしてもらうことで、子どもたちの「青森ねぶた」に対する興味・関心を向上に繋がるはずである。

加えて、1 学年と 2 学年の子どもたちに対する配慮も考えなくてはならない。途中休憩があるものの、2 時間という運行は体力的にも厳しいものがある。そこで、休憩する前を前半、休憩後を後半と設定し、前半と後半の両方、もしくは、前半か後半のどちらかに参加する形にしてみることが提案の一つである。

そして中には、飽きてしまう子どもがいるはずである。そのため、一学年の保護者の方からの意見にあるように、「ねぶた大好き！」活動に来年、再来年から加わる子どもたちには、「跳人」の練習の時間を与えるべきである。一つの意見として、「ねぶた大好き！」の時間を月一回全校で「ミニねぶた祭」という形を取る。そこで、古川地域パレードの予行練習を実施し、低学年の子どもたちだけでなく、全校で一度「跳人」の練習をしてみることを提案する。このような提案をしたことには理由がある。それは、若者の跳人離れ問題に加えて、跳人の質

が落ちていると感じたからだ。全員で跳人体験をすることで、楽しいと感じてくれることに加えて、実際のねぶた祭でも跳ねてみたいと感じてくれる子どももいるはずである。

第2節 地域住民対象アンケート

第5章地域住民対象アンケート調査結果

ここでは、青森市立古川市民センターで2014年1月に実施したアンケート調査の結果を紹介する。古川地域の住民対象とした調査であったが、古川地域以外から、お越しになられているセンター利用客に対しても、ねぶた教育についての意識調査を実施した。

アンケート回収分 58部 (古川地域住民 15部 他地域の住民 43部)

1 「古小ねぶた」地域パレードをご覧になったことはありますか。

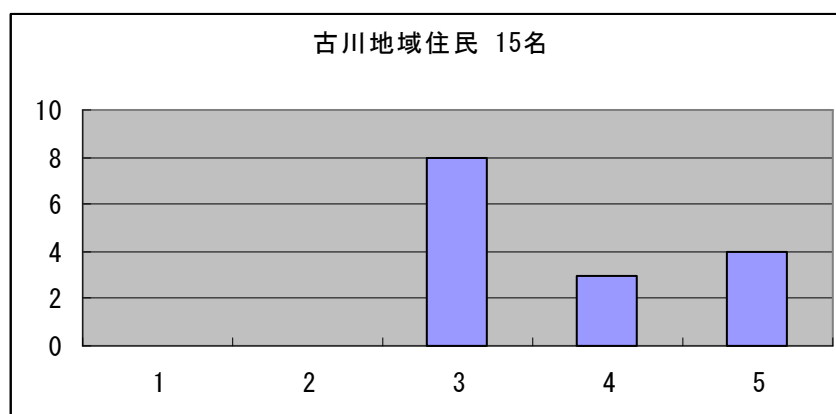
1 はい 2 いいえ

	1	2
古川地域住民 15名	13	2
	86.7%	13.3%

2 地域パレードを観覧し、古川小学校への信頼を持つことができるようになった。

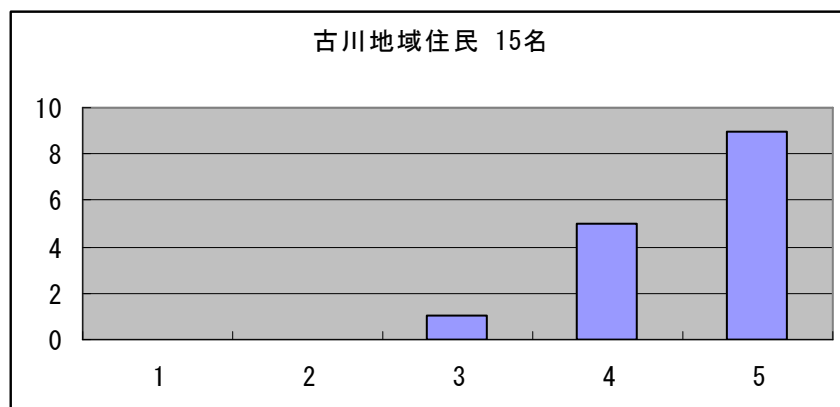
または、信頼が増したと思いますか。

1=そう思わない 2=どちらかといえばそう思わない 3=どちらでもない
4=どちらかといえばそう思う 5=強くそう思う 4+5=肯定的と評価



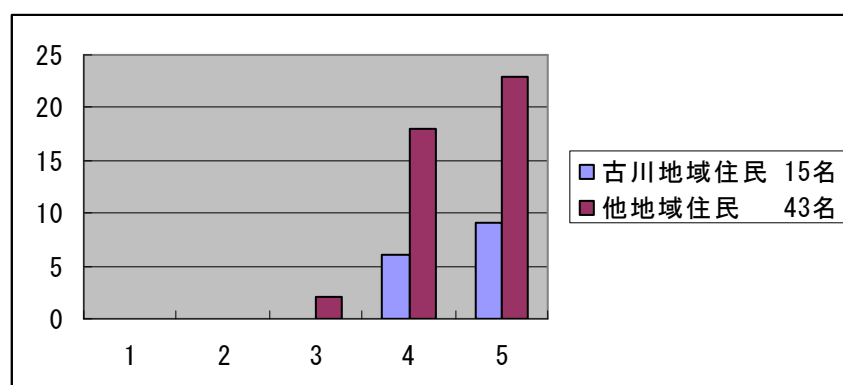
	1	2	3	4	5
古川地域住民 15名	0	0	8	3	4
	0%	0%	53.3%	20.1%	26.6%

3 今後も「古小ねぶた」を続けていくことが望ましいと思いますか。



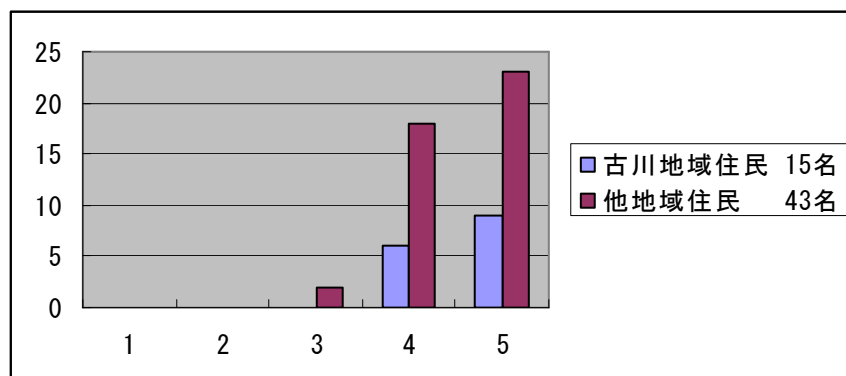
	1	2	3	4	5
古川地域住民 15名	0	0	1	5	9
	0%	0%	6.6%	33.3%	60.1%

4 「古小ねぶた」のように,子ども・保護者・地域の住民・教員が関わることのできる
ねぶた活動は学校での取り組みとして望ましい活動であると思いますか。



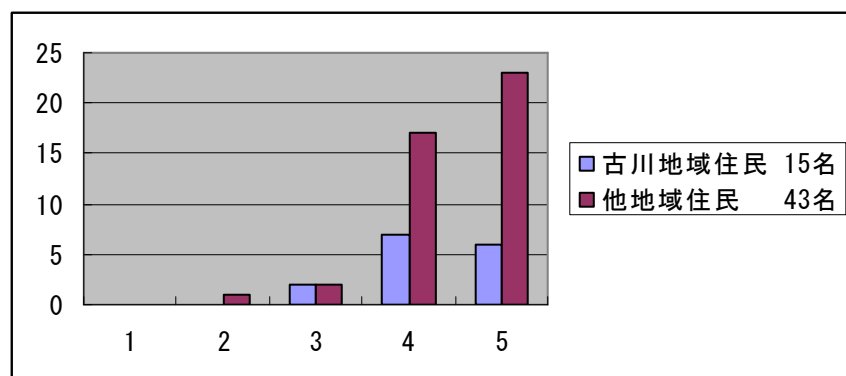
	1	2	3	4	5
古川地域住民 15名	0	0	0	6	9
	0%	0%	0%	40.0%	60.0%
他地域住民 43名	0	0	3	18	22
	0%	0%	6.9%	41.8%	51.3%
総計 58名	0	0	3	24	31
	0%	0%	5.2%	41.4%	53.4%

- 5 「古小ねぶた」のように学校現場において、
地域の伝統文化を取り入れることは必要であると思いますか。



	1	2	3	4	5
古川地域住民 15名	0	0	0	6	9
	0%	0%	0%	40.0%	60.0%
他地域住民 43名	0	0	2	18	23
	0%	0%	4.7%	41.9%	53.4%
総計 58名	0	0	2	24	32
	0%	0%	3.4%	41.4%	55.2%

- 6 学校でねぶたを制作・運行することは地域の活性化に繋がると考えますか。



	1	2	3	4	5
古川地域住民 15名	0	0	2	7	6
	0%	0%	13.3%	46.7%	40.0%
他地域住民 43名	0	1	2	17	23
	0%	2.3%	4.7%	39.5%	53.5%
総計 58名	0	1	4	24	29
	0%	1.7%	6.9%	41.4%	50.0%

- 7 地域の方々が「古小ねぶた」に関わっていくために、
学校側はどのような工夫をしていけばよいか、意見がございましたらお書きください。

<古川地域住民>

- ・地域の方々が気軽に参加できるお囃子の講習会があるといい。
- ・(ねぶた活動とは別に)子どもと地域の人に関わる機会を設ける。
- ・たまに子どもと集まって遊んだり・ゲームをしたりして関係作りをしていく。
- ・各地域をねぶたが通る予定の時間がわかるようにする。
- ・運行はPTA,父兄だけでは無理だと思うため、
地域が巻き込んでいける様に働きかけをする。
- ・民謡とか盆踊りとか教えることができるから、その機会をつくって関わっていきたい。

<古川地域以外の住民>

- ・子ども会が無くなったから、学校が子ども会のような役割を果たせたらよい。
- ・コーディネーターの発掘をする。
- ・市民センター活動との連携。
- ・町内へのPRとボランティアの募集をする。

2 項 地域住民対象アンケート調査結果の考察

古川地域の住民の方々を対象とし、地域の中にある古川小学校のねぶた活動に対してどのように感じているのか、地域の住民にどのような効果があるのかを明らかにしようと考えていた。しかし、古川地域の住民のアンケート回収が15部となってしまったため、古川市民センターを利用するために、古川地域以外からお越しになられていた方々へのねぶた教育に対する意識調査を併せて考察していく。なお、質問項目の1から3は、古川地域以外の住民は答えにくい質問であったため、質問4から6までの項目を答えて頂いた。

まず、1の項目では古川地域パレードの観覧状況が明らかになった。15人中13人が観覧の経験があるという結果であった。古川小学校の学区全体を運行するパレードのため、回収人数は少ないが、古川地域のたくさんの方々に子どもたちの活動を見てもらえていることが考えられる。

そして、2の項目である。古川小学校の教育活動であるねぶた活動を、地域パレードという形として古川地域の方々に見てもらうことで、関係性が良くなるのかを明らかにするために設定した。しかし、肯定的な評価(5段階評価で4と5を選択)をした人は46.7%であり、どちらとイえないと答える人が多く存在したことから、活動を見て頂くだけでは関係性は築くことができないということを改めて知ることができた。

「古小ねぶた」を今後も続けていくべきと肯定的な評価をした方は、15人中14人という

ことが3の項目で明らかになった。これは、地域の方々の「古小ねぶた」への期待の表れであろう。10年間の継続的な活動とパレードで古川地域全体を運行することでの住民からの認知があるからこそ、この結果が明らかになったと考える。

4の項目では、子ども・保護者・地域住民・教職員の四者全員が関わることのできる教育活動の必要性を尋ねた。肯定的な評価をした人は94.8%という結果であり、地域の方々も子ども・保護者・地域住民・教職員の四者全員が関わることのできる活動を良い活動として捉えていることが明らかになった。地域の教育力の向上が謳われる今の教育現場において、地域の住民を教育現場に招くことが求められている。2の項目で明らかになったように、教育

活動を見て頂くだけでは、学校側との強い結びつきは期待できない。ねぶた活動のように、地域住民も子どもたちと共に体験活動のできる機会を模索していくこと。市民センターのような地域の方々が訪れる場所での活動参加への呼びかけをしていくことが必要である。

5の項目では、学校現場で「青森ねぶた」のような伝統文化を取り入れることの必要性について尋ねた。保護者の方にも同様の質問をした所、肯定的な評価をしたのは91%であり、地域住民は96.6%であった。多くの保護者・地域住民が、伝統文化を学校で教えることの必要性を感じていることが明らかになった。今回の調査の際に、津軽民謡を教えたい、運行の際に応援をしたいというように、子どもたちと関わりを持ちたいという方が大勢存在した。このような地域の方々が学校と関係が持つことのできるように、子どもたちが遊ぶ機会や、地域の住民にも情報が伝わるような公共施設などを学校と地域住民双方の情報提供の場にすることを提案する。このような活動は、地域に「開かれた学校」づくりをするための一つの働きかけになるであろう。

最後に6の項目である。この項目は「古小ねぶた」のような地域のシンボルとなる活動を実施することが、地域の活性化に繋がるのかを尋ねた。この項目でも、肯定的な評価をした人の割合は91.4%と9割を超えた。この結果について、「子どもたちの笑顔があるからこそ大人が笑顔になれる。」という意見や、子ども会の減少により、子どもたちと触れ合う機会が少なくなっていると感じている方が多数存在する現状から、子どもと大人の相乗効果により地域が活性化すると考えている人が多いのではないかと考察した。

そのため、地域社会と子どもの関わりが減少している中で、学校が従来の子どもの会のような場を提供していかなければならないと今回の地域住民へのアンケート調査で考えるようになった。加えて、調査内での地域住民との会話から、小さい頃から地域の文化に触れることの必要性を再認識した。大人になってから「青森ねぶた」や青森市内の未来を担う人材になるという意見、青森から他県へ行く子どもが、行く先で「青森ねぶた」について宣伝してくれることで、全国への宣伝となり青森が活性化するという意見も頂くことをできたからである。

最後に、「青森ねぶた」に対する興味・関心や青森県の伝統文化を尊重する心情が、地域の活性化や地域の再生や、未来の青森県を担う人材の育成に繋がるということを地域の

方々への調査で認識することができた。そして、協力してくれた地域住民の持つねぶた教育への期待を果たせるように、私自身も、学校現場でねぶた教育の発展に貢献していきたいと強く感じた。

第3節 教職員対象アンケート調査

1項 教職員対象アンケート調査結果

ここでは、青森市立古川小学校の教職員 11 名を対象に実施した、ねぶた教育に関する意識や効果と古川小学校でのねぶた教育の積極面・問題面を明らかにするためのアンケート調査の結果を紹介する。

1 「古小ねぶた」をこれから入学してくる子どもたちにも残していきたいと思いませんか。

1=そう思わない 2=どちらかといえばそう思わない 3=どちらでもない
4=どちらかといえばそう思う 5=強くそう思う 4+5=肯定的と評価

	1	2	3	4	5
古川小教職員 11 名	0	0	0	6	5
	0%	0%	0%	54.5%	45.5%

2 これまで勤務していた学校と比べて、
古川小学校は保護者や地域住民と良い関係が構築されている
学校であると思いませんか。

	1	2	3	4	5
古川小教職員 11 名	0	0	2	7	2
	0%	0%	18.2%	63.6%	18.2%

3 学校現場において、ねぶたのような「地域の伝統文化」を取り上げることは
子どもたちの成長に有意義な効果を与えられますか。

	1	2	3	4	5
古川小教職員 11 名	0	0	0	8	3
	0%	0%	0%	72.7%	27.3%

4 「ねぶた大好き」活動内での良い点,改善点・問題点がございましたらお書きください。

<良い点>

- ・毎年,同じ時間に設定しているので,活動を応援してくれている”一心會”にとって,時間の都合が合う。
- ・地域の文化を伝えることができる。
- ・地域の良さを見つめ直すことができる。
- ・子どもたちが意欲的に活動に取り組み,笛・太鼓・手振り鉦の練習を重ねるごとに力をつけていっている。
- ・郷土の文化を見るだけでなく,実際に作ったり,囃子を実演したりすることで,「ねぶた」を身近に感じることができる。
- ・学年の枠を越えて,同一の活動をすることの良さは数多くあると思う。
- ・保護者・地域の方々に直接指導してもらえること。
- ・一心會の方々が講師として熱心に指導して下さるので,子ども達のやる気も高まっている。
- ・地域の方と共に児童の教育をできること。
- ・児童に地域のよさを気づかせ,愛校心,郷土愛を育むことができること。
- ・青森市のまつりについて小学校の時からしっかり体験できること。
- ・地域の伝統を引き継ごうとする子どもたちの心が育つよう,地域の方々の手助けや協力的なのがとても良い。

<改善点,問題点>

- ・地域ねぶたに向けての細かな打ち合わせ等が難しい。
- ・指導して下さる地域の方々の時間の都合等
- ・学級数が減り,担任の数も減ってきている。
- ・他の行事との調整が難しい。
- ・協力して下さる方とのコンタクト。
- ・本来であれば,上級生が下級生に受け継がれていくような形態が望ましいと思う。
- ・上学年は新しく覚える学年に教えていくことは継続しつついろいろなパターンの囃子に前もって取り組んでいっても良いのでは。

(今後も連合音楽会にねぶた囃子で参加していくことを見通して)

5 「古川地域パレード」「青森ねぶた合同運行」を実施することの
良い面,改善点・問題点がございましたらお書きください。

<良い点>

- ・児童に地域のよさを気づかせ、愛校心、郷土愛を育むことができること。
- ・地域パレードでは地域の人たちとの交流を深めることができる。
- ・成果を発表する場として、保護者・地域の応援があつてやれているので大変よい。
- ・地域の人たちもよろこんでくれている姿を子どもたちにも見ることができる。
- ・郷土愛を育む上で有効である。
- ・夜、ねぶたに火が入ったのを引いて練り歩くことで、ねぶたとの一体感がある。
- ・地域の中の小学校としての位置づけがしっかりできている。
- ・子どもたちの練習の成果を地域の人に見てもらえること。
- ・毎年楽しみにし、喜んでくれている人がいること。
- ・地域を大事に思い、守り伝えていこうとする意識は育っていると思う。

<改善点・問題点>

- ・準備や片付け等の保護者への比重に偏りがある。
- ・はねとの子どもや保護者へのお願い等「声だし・はねる」ことをチラシで事前に配布しておく方が良いかも。
- ・費用がかかる。
- ・休日の行事で自由参加になるので、その温度差が少しある。
- ・とくに感じないが、仕事（勤務）として捉えると特殊な時間帯であること。
(家庭事情等)
- ・夏休みが2日間取られ、野球の試合と重なる。
- ・旅行に行く児童やサッカーの試合と重なるため、児童の掌握が当日まで難しい。
(特に、地域ねぶたは雨天も考え、土日にセットされている。)

2項 教職員対象アンケート調査結果の考察

項目1から、教職員の中で「古小ねぶた」を継承していくことの必要性を感じており、「どちらかといえばそう思う。」と「強くそう思う。」のどちらかを回答したのは全員であった。今後の古川小学校におけるねぶた活動の存続を、教職員の方々も強く感じている様子がこの結果から伺える。古川地域ねぶたパレードは一学期の末に実施されるように、教職員の方々の多忙な時期と重なってしまう活動ではあるが、「古小ねぶた」の10年間の歴史や協力してくださる地域の方々への兼ね合いを考え、今後の「古小ねぶた」存続を継承していかなければならないと感じているのであろうと考える。

項目2では、教職員の方々のこれまでの勤務地と比較してみて、古川小学校は保護者・地域住民間での良好な関係づくりを構築することができている学校かどうかを質問した。評価の値が分散していたことに対して、古川小学校に長く勤めている方と最近他校から古川小学校へやってきた方で感じ方が違うと考えられる。しかし、半数以上が肯定的な評価をしてい

ることは、古川小学校は保護者・地域住民と良い関係性が構築されているのではないかと考察できる。これは、小規模の学校であるため多数の保護者の方々と関わることができることや、子ども・保護者・地域の住民・教職員の四者全員が関わることのできる、ねぶた運行の活動も影響しているのではないかと考える。

学校現場において「地域の伝統文化」を取り上げることが、子どもたちの成長に効果を与えるのかどうかを明らかにするための項目が 3 の項目である。この項目も肯定的な評価をしたのは全員であった。教職員の方々が地域の伝統文化を子どもたちに教えることの必要性を感じていることがわかる。そして、ねぶた教育の積極面として、地域の良さを見つめ直すことができることや、郷土に対する愛情を育てることができると考えている教職員が多かったことから、教職員の方々がねぶた教育に対して、子どもたちの地域を愛する心情を育てる活動であると大きく期待をしているのではないかと考えられる。

第5章 結論

第1節 古川小学校におけるねぶた活動への総合的考察

1項 古川小学校におけるねぶた活動の積極面

①子どもたちが高い「青森ねぶた」に対する興味・関心や
伝統継承の意識を持つことができるねぶた活動

第3章の古川小学校の児童を対象とした「青森ねぶた」に関する意識調査では、当校の子どもの持つ「青森ねぶた」に対する興味・関心が、ねぶた活動を実施していない小学校の子どもと比べ、高い数値であることが明らかになった。

理由として考えられるのは、子どもたちが「ねぶた大好き！」活動内でねぶた制作や太鼓・笛・手振り鉦などのお囃子の練習、古川地域パレードと青森ねぶた合同運行といった豊富な体験活動が展開されていることが一つである。

そして、ねぶた師が大型ねぶたを制作する現場を見学することのできる「ラッセランド」や、ねぶたの歴史や、祭りの移り変わりを知ることのできる施設「ワ・ラッセ」を授業内で見学することも子どもたちの「青森ねぶた」に対する興味・関心や伝統継承の意識を持つことに効果のある活動であると考えられる。

②学校と保護者の良好な関係づくりに貢献できるねぶた活動

保護者対象のアンケート調査では「ねぶた活動を通して、学校側との関わりを少しでも持つことができた、または、関わる機会が増えた。」と肯定的な評価で回答した保護者は66%であることが明らかになった。

同時に、教員対象アンケート調査の「これまで勤務していた学校と比べて、古川小学校は保護者や地域住民と良い関係が構築されている学校であると思いますか。」の質問に対して、11人中9人が肯定的な評価をしていたことから、ねぶた活動が学校と保護者の良好な関係づくりに貢献できる活動であることが明らかになった。

教職員だけではなく、保護者の方々の力強い支援も「古小ねぶた」を支えている要因の一つである。ねぶたの運行の際に、教職員と保護者で役割を分割していることで、子どもたちが安全に楽しくねぶたを楽しむことや、「古小ねぶた」の10年間の継続的な活動として表れているのではないかと考える。

本調査の中で、保護者の方々からの「古小ねぶた」更なる発展のための多数の意見が寄せられた。これは、保護者の方々の持つ、古川小学校のねぶた教育に対する興味や関心が高いことの表れである。今後とも、保護者と教職員が協力する姿勢を是非維持してもらいたい。

2 項 古川小学校におけるねぶた活動の問題面

本調査より明らかになった問題面を 4 つ挙げる。

①第 3 章 第 2 節の 2 項から

「子どもたちの祭りを伝えていく意識がねぶた教育の非実施校と同じ数値」

② 第 4 章 第 1 節から「パレード時の 1,2 学年児童への配慮」

③ 第 4 章 第 2 節から「学校と地域住民の関わり」

④ 第 4 章 第 3 節から「指導者主体のねぶた活動」

この 4 つの問題点を少しでも改善するための活動の提案をさせて頂く。

地域の住民を招いて、ねぶたの制作の様子や囃子の演奏を発表する場をつくる。

これは問題面①と③の改善のための提案である。地域パレードの運行内で囃子を披露することも伝統文化を継承する意識の向上に繋がると考えていたのであるが、祭り自体は楽しいものであり、沿道の方々へ披露するという意識を忘れてしまうことが懸念される。そのため、市民センターや町会への情報発信から地域の住民の方を招き、ねぶた活動での成果を発表する機会を設定する。そして、来校した地域の住民の方との関係性を築いていくことができたならば、子どもたちの伝統文化を継承する意識の向上や学校と地域住民との関係づくりができるのではないかと考える。

1,2 学年児童を対象の跳人の練習会を設ける

これは②の問題面の改善に向けた提案である。運行では 1,2 学年の児童が長い道のりを歩くだけであるため、体力や集中力が持たないとの意見や、跳人が盛り上がり欠けるという意見を多く頂いた。体力や集中力以外にも、子どもたちは、ただ歩くだけでは飽きてしまうことも考えられる。低学年の跳人の練習の為に、「ねぶた大好き！」の時間を月一回全校で「ミニねぶた祭」という形を取る。そこで、古川地域パレードの予行練習や、全校で一度「跳人」の練習を試みることを提案する。全員で跳人体験をすることで、楽しいと感じてくれることに加えて、実際のねぶた祭でも跳ねてみたいと感じてくれるはずである。

制作では子どもたちが題材を考えたり、子どもたちだけの手で作る部分の設定。
囃子では、子どもたち同士で教える時間の設定。（戻りの演奏など）

訪問調査や子どもたちと教職員対象のアンケートから上記の活動を提案した。小学生の段階で、制作や囃子を子どもたち自身で仕上げるということは非常に難しい。しかし、私は古川小学校のねぶた活動は指導者が主体となりすぎていると感じる。パレードに出陣するねぶたとお囃子は、作品としても演奏としても素晴らしい。だが、子どもたちだけでねぶたを作ったり、演奏を完成させたりする活動の方が、子どもたちにとって楽しい上に、やりがいを感じると私は考えた。そこで、少しでも子どもたちが達成感を感じてくれるような取り組みを提案させて頂いた。

第2節 ねぶた教育に対する保護者・地域住民・教職員の

意識と効果についての一考察

先行研究では子どもたち中心に「青森ねぶた」に関する意識調査が実施されてきたのであるが、本調査では保護者・地域住民・教職員を対象に意識調査を実施した。意識調査で明らかになったことは「地域の伝統文化を学校教育で取り上げることの必要性」と「保護者・地域住民と共に実施する活動によって、学校との関係づくりに貢献できること」である。

まず、「地域の伝統文化を学校教育で取り上げることの必要性」に関しては、保護者の肯定的な評価は90.7%、地域住民の肯定的な評価は94.8%であった。そして、「地域の伝統文化」を学校教育で取り上げることで、子どもたちの成長に有意義な効果を与えると回答した教職員は回答者が少ないのではあるが100%であった。この結果より、子どもたちに学力を身につけさせることが期待されている学校教育において、「知育」と同等に子どもたちに地域の良さや郷土愛といった「徳育」をしていくことも保護者・地域住民は重要視しているということを考察する。地域の伝統文化を学校教育で取り入れることの必要性を感じる保護者・地域住民が多い点と、小学校から地域の伝統文化を体験することによって、子どもたちが地域の良さを感じたり、郷土愛を持つことができたりすることが地域の活性化や未来の青森県の発展に貢献できる子どもたちの育成に繋がる点を考えると、ねぶた教育を実践していくべきであると考ええる。

そして、ねぶた教育を実施する際に、子どもたちと教職員の二者の間で実施していくのではなく、子ども・保護者・地域住民・教職員の学校を構成する四者で実施していくことが重要であると考ええる。それは、地域の良さを感じたり、郷土愛を持つことができたりすることに加え、他学年間での交流の中で学ぶ人間関係の構築の仕方といった子どもたちの内面の成長を促すことと同時に、学校と保護者・地域住民間の関係づくりに貢献できる活動であるからである。本調査で、ねぶた教育を通して学校側との関わりを少しでも持つことができた、関わる機会が増えたという肯定的な評価で回答した保護者は66.6%。他の保護者との関わりを少しでも持つことができた、関わる機会が増えたという肯定的な評価で回答した保護者は66.7%という結果が明らかになった。保護者同士の関係づくりの点、学校と保護者間の関係づくりの点において約7割の保護者の方が肯定的な評価をした。そして、教職員の方々がこれまで勤務していた小学校と比較した際に、保護者・地域住民と良い関係性を持っている小学校と感じているのは11人中9人であったことから、ねぶた教育が学校と保護者の架け橋になっていることが言えるはずである。要因として考えられるのは、「運行への極力の参加を呼びかけていた学校側の働きかけ」と「教職員と保護者で運行時の役割の分担」が挙げられる。双方が共に一つの行事を作り上げることが関係性を築いていくための手段であると考ええる。運行を実施するために、学校と保護者との綿密な打ち合わせが難しいという意見も頂いたが、保護者と共に行事を作り上げる形は、学校・保護者の関係づくりに貢献できる点と安全なねぶた運行の実施ができる点を踏まえて、双方の負担にならない程度に実施していくことが望

ましいと考える。

ねぶた教育を実施することで、学校と保護者間では双方の関係づくりに貢献できるということが明らかになったのではあるが、学校と地域住民間ではその効果を見ることはできなかった。古川地域にお住まいになられている住民の中で、ねぶた教育を通じて学校に対する信頼が増したと感じるようになったと肯定的な評価をした方は15名中7名であったからである。要因として考えられるのは、「地域住民の関わる機会が運行の観覧に偏っていること」が挙げられる。要因から活動を見て頂くだけでは関係性を築くことができないことが明らかになった。そのため、地域住民と関係づくりをしていくためには、共に子どもたちと活動することや運行時の役割を要請するといった直接関わる機会与えていくことが必要となってくる。以上の取り組みによって、学校と地域住民の関係づくりができるのであれば、本質的に子ども・保護者・地域住民・教職員の四者が関わることのできるねぶた教育になるはずである。そして、学校の所在する地域全体で子どもたちを育てていくことに強く貢献できるねぶた教育となると私は考える。

最後に、学校と保護者の間で強い結びつきができている古川小学校の調査結果から「運行」を実施する意義として「子どもたちが祭りの雰囲気味わうことができる。」と「学校と保護者・地域住民の関係づくりができる。」と位置づけることができるのではないかと考える。

謝辞

本論文の作成にあたり,調査の協力をいただいた青森市立古川小学校の教職員並びに,児童・保護者の皆様,また,青森市立古川市民センターの職員並びに,お忙しい中アンケート調査に協力を頂いたセンター利用客の皆様,そして,真摯にご指導くださった指導教員の大谷良光先生に深く感謝申し上げます。

参考文献

文部科学省 小学校学習指導要領（2008年度版）

文部科学省 中学校学習指導要領（2008年度版）

大谷良光編：『ねふた・ねふたと津軽の子ども・学校』

弘前大学教育学部「ねふた・ねふたと学校教育」研究プロジェクト編 2012年

鎌田沙穂：『ねふたの制作・祭運行に参加することによる子どもの祭り観の変化

～弘前市立北小学校・青森県立弘前高等学校ねふた活動を対象として～』

青森市立古川小学校：『平成 25 年度 学校経営要覧』